

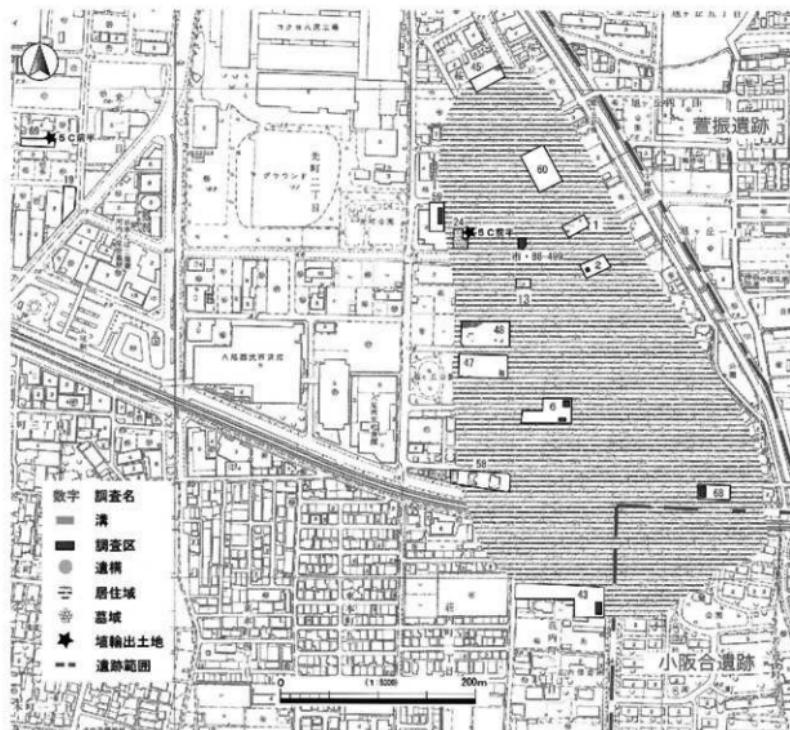
埴輪棺墓から成る28基以上で構成されている。そのうち、墓域中で最も新しい時期のものは前期中葉(布留式中相)に築造された2基の方墳(8古墳・90古墳)がある。ただ、この古墳が構築された時期において、東郷遺跡内では居住域が確認されていないため、北東に隣接した萱振遺跡南部(緑ヶ丘五丁目)の第12次・第14次調査で検出された居住域を中心とする集団との関係が推定される。

前期後半(布留式新相)の遺構は、居住域D内の第48次や第60次調査で散発的に検出されている程度であるため、比較的小規模な居住域が展開したものと想定される。

古墳時代中期から後期

第47次調査で土坑3基(SK101~103)、第48次調査で土坑3基(SK201・203・204)、落ち込み1箇所(SO201)等の古墳時代中期中葉から後半の居住域を構成した遺構・遺物を検出した。

中期の居住域は、第1次・第2次・第7次・第13次・第47次・第48次・第60次調査地一帯の東西約200m、南北約350mが想定される。墓域としては第24次で方墳の周濠と墳丘に置かれていたと考えられる5世紀中葉の円筒埴輪片が出土しており、居住域に近接した位置に古墳が設



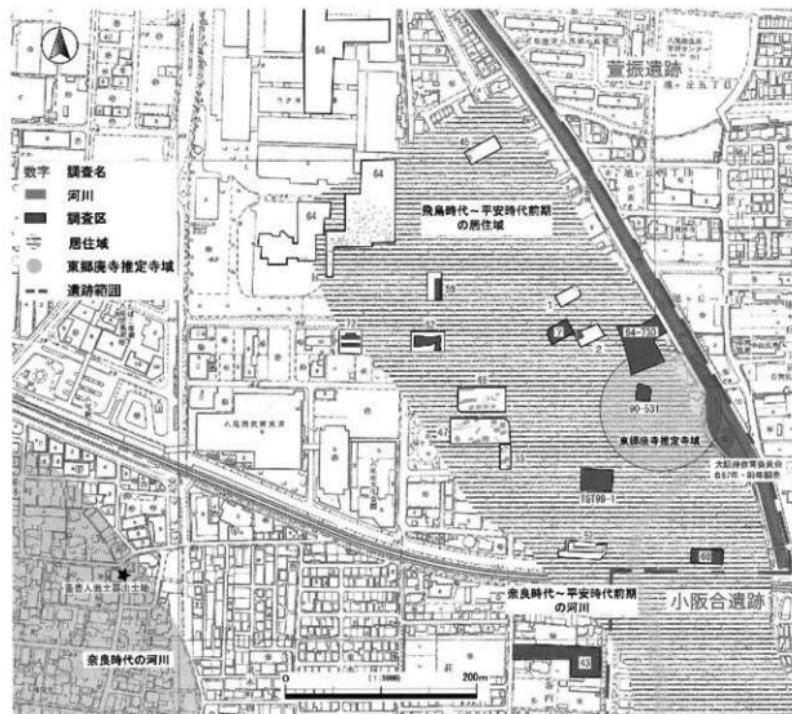
第41図 東郷遺跡東部古墳時代中期から後期の遺構分布

けられている。

古墳時代後期の遺構については、中期の居住域を踏襲するかたちで推移しており、遺跡範囲東部の第1次・第6次・第13次・第60次調査地付近を中心検出されている。一方、遺跡範囲北西部の北本町二丁目付近の第69次調査では、古墳時代中期の円筒埴輪や古墳の周溝と推定される溝、第54次調査では、古墳時代後期の耳環等が出土しているため、東部の居住域に対する墓域であった可能性がある。

飛鳥時代

飛鳥時代の主な遺構は、第47次調査で掘立柱建物4棟(SB101・102・105・109)、第48次調査で掘立柱建物1棟(SB106)、土坑2基(SK113・114)、溝1条(SD203)がある。掘立柱建物は両調査地を合わせて5棟検出した。主軸方向をN30°W～N38°Wに持つ建物群で、平地式のものが4棟(47次-SB101・105・109、48次-SB106)、高床式のものが1棟(47次-SB102)である。この時期の居住域は、古墳時代中期から後期の居住域を構成した遺跡範囲東部の微高地



上に立地している。また、第47次・第48次調査地から東約150mの桜ヶ丘二丁目付近には飛鳥時代中期創建の東郷廃寺が位置しており、寺院を中核とした居住域の広がりが想定される。東郷廃寺については、昭和59(1994)年に桜ヶ丘二丁目で実施された市教育委員会による遺構確認調査(94-730)や昭和62~63(1987~1988)年に大阪府教育委員会による楠根川改修工事に伴う発掘調査により屋瓦類が発見されたことから付近一帯に寺院跡が存在した可能性が示唆されていた。さらに、平成3(1991)年度に八尾市教育委員会による遺構確認調査(90-531)においては、寺院跡を確定し得る約850点に及ぶ多量の瓦片の出土により寺院跡と確認され、旧地区名から「東郷廃寺」の寺名が付与された。その後、東郷廃寺周辺では、平成11(1999)年に東郷廃寺第1次調査、平成20(2008)年に遺構確認調査(2008-96)調査が実施され、前者では奈良時代~平安時代の整地層、後者では瓦類が確認されている。これらの一連の調査成果では、寺院伽藍が想定される寺院建物の検出は未発見であるものの、出土した屋瓦類から東郷廃寺は飛鳥時代中期(7世紀中葉)の創建で、創建瓦には原山廃寺(柏原市)系の軒丸瓦が使用されていることや、寺院が平安時代前期まで存続したことが明らかになった。

飛鳥時代の集落は第48次調査以外では、第6次・第45次調査で飛鳥時代後半(飛鳥IV)の溝が検出されている程度で、東郷廃寺に相応する集落の実態については不明な点が多い。

奈良時代後期から平安時代前期

奈良時代後期から平安時代前期においては、掘立柱建物群が居住域の中核を成している。建物の主軸がN5°W~N20°Wを指す第47次調査のSB103・104・110、48次調査のSB101~105が奈良時代のもので、SE101~103がこれらの建物群に付随した施設と考えられる。一方、座標北を指す第47次調査のSB106~108、第48次調査のSB102が平安時代前期を中心とするもので、第47次調査からはこれらの建物に付隨した井戸4基(SE104~107)が検出されている。両調査区においては、奈良時代後期から平安時代前期の掘立柱建物11棟以上が検出されており、当該期において長期間に亘って比較的安定した居住域が営まれていたことが看取できる。これらの要因としては、東接する位置に存在した東郷廃寺との有機的な関係や調査地の南部に近接して、後世に立石嶺道と呼ばれる東西方向に伸びる街道に隣接した交通至便な地理的条件等によるものと推察される。

奈良時代から平安時代前期の遺構は、東郷廃寺を含む東郷遺跡南東部から小阪合遺跡の北部一帯で検出されている。東郷遺跡の第6次・第33次・第47次・第48次・第52次・第64次調査、小阪合遺跡の大坂府文化財調査研究センターによる第1次調査(98-1~7区)、大阪府文化財センターによる第2次調査(02-1~05区)、当調査研究会による第40次・第41次調査では、居住域を構成した多数の掘立柱建物・井戸・土坑等の他、墨書きを持つ上師器・須恵器といった遺物が出土している。なかでも、98-5区の川200、98-7区の川719およびその上流部にあたる第40次・第41次調査で検出した同一河川内からは、墨書き上器を含む奈良時代後半から平安時代前期を主体とした大量の土器類や和同開珎をはじめとする200枚近くの皇朝錢が出土しており、この付近一帯に地域を統括した官衙的な役割を果たした施設が存在した蓋然性が高い。

一方、遺跡南西部には、南の成法寺遺跡域から北流する奈良時代頃の大規模な河川が想定され、この流域から当遺跡発見の契機となった奈良時代後期の墨書き人面土器をはじめとして数多くの墨書き人面土器が出土している。この河川の上流部の東弓削地区には、奈良時代後半の神護景雲三

(769)年に称徳天皇により設けられた「西京」並びに『統日本紀』に記された「由儀宮」「弓削寺」「弓削行宮」があり、遺物の性格からみてこの地域との有機的な関連が想定される。

註記

- 注1 原田昌則 2003「第1節 中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(II)内式古墳の土器の縦分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う－』(財)八尾市文化財調査研究会報告74
- 注2 原田昌則 1993「第5章 まとめ 3」中河内地域におけるII内式から布留式土器の縦分試案』『II久宝寺遺跡(第1次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37

参考文献

- ・奥 和之ほか 1989『東郷遺跡発掘調査概要・I一八尾市櫻ヶ丘・旭ヶ丘所在』大阪府教育委員会
- ・山上 弘 1989『成法寺遺跡発掘調査概要・IV一八尾市高美町所在』大阪府教育委員会
- ・駒井正明・木間元樹ほか 2000『八尾市若草町所在 小阪合遺跡 一都市基盤整備公園八尾団地辻替えに伴う発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第51集(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・清 斎 1995『東郷遺跡発掘調査報告』『八尾市文化財紀要7』八尾市教育委員会文化財課
- ・清 斎 1996「11. 東郷廃寺(94-730)の調査』『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告33 平成7年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・清 斎 1992「9. 東郷遺跡(90-531)の調査』『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 2000「1. 東郷廃寺遺跡第1次調査(T G T99-1)』『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告1』八尾市教育委員会 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2001「17. 成法寺遺跡第18次調査(S H2001-18)』『平成13年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・木間元樹・辻木 武ほか 2004『八尾市 小阪合遺跡(その2) 八尾団地(建替)埋蔵文化財発掘調査(第2次)』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第116集(財)大阪府文化財センター
- ・岡田清一・菊井佳弥 2006「16. 小阪合遺跡第40次調査(K S 2005-40)』『平成17年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 薫・河村恵理・鬼頭 彰 2008「9. 小阪合遺跡第41次調査(K S 2006-41)』『平成19年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 薫 2009「II 平成20年度市内発掘調査報告(平成20年4月～12月) 12 東郷廃寺(2008-96)』『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告59 平成20年度国庫補助事業 八尾市教育委員会

※その他の東郷遺跡関連の文献については、本書Iに掲載した第1表(p 3～p 5)を参照されたい。

図 版



南区東部第1面(東から)



南区S K108検出状況(東北から)



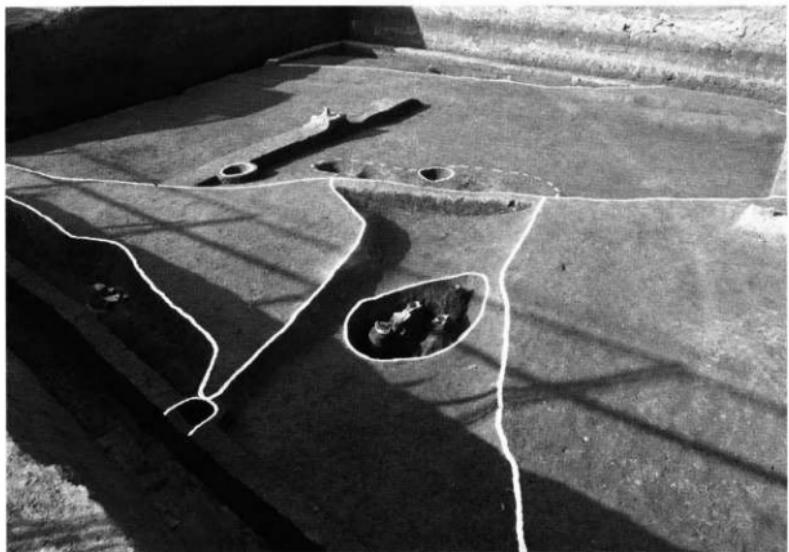
南区 S K109検出状況(南から)



南区 S K112検出状況(南東から)



北区東部第2面(東から)



南区西部第2面(南東から)

図版四



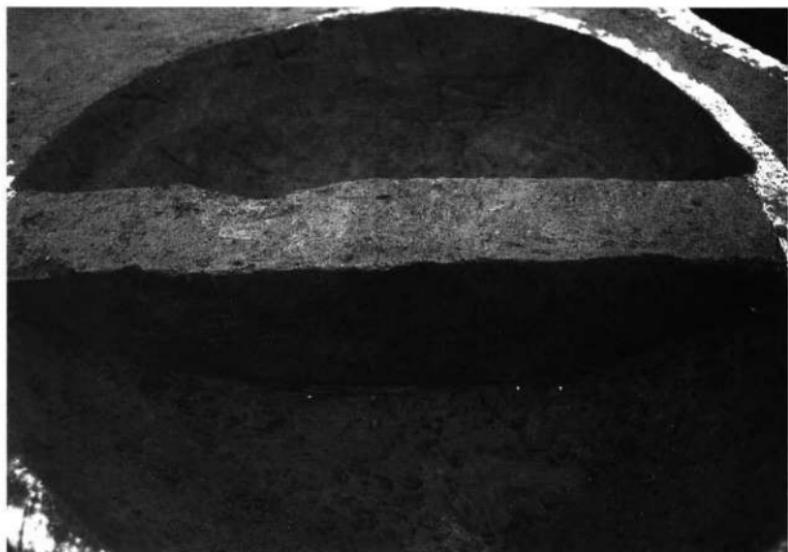
北区SK201(南から)



南区SK203(東から)



南区SK204(東から)



北区SP216(北から)

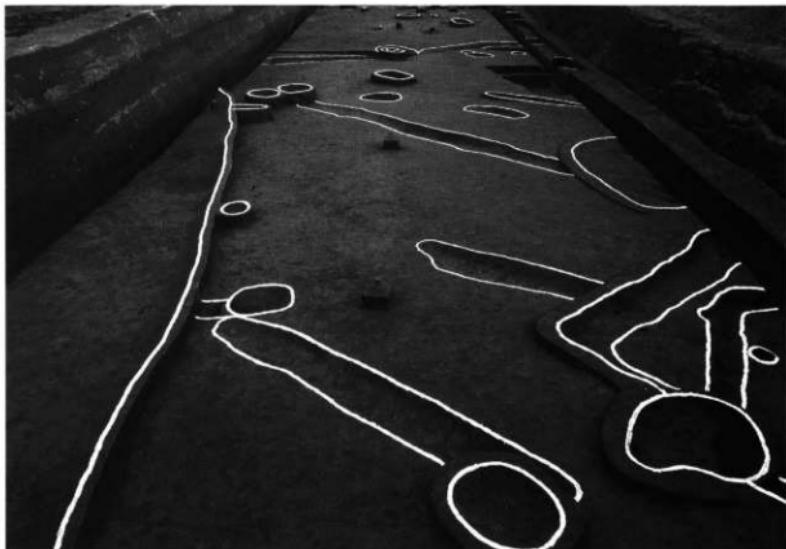
図版六



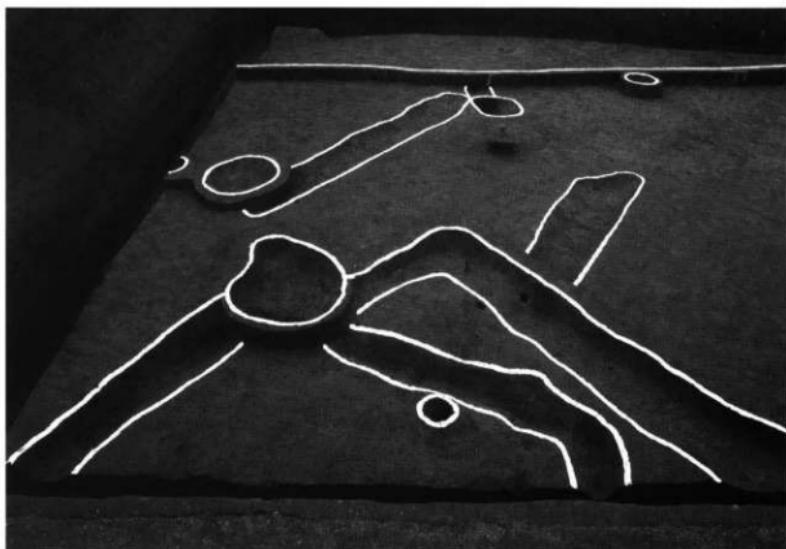
北区N R 201~203(東から)



南区第2・3面(西から)



北区第2・3面(西から)



北区S 301・302(南から)

図版八



北区SK302(東から)



南区SK306(北から)

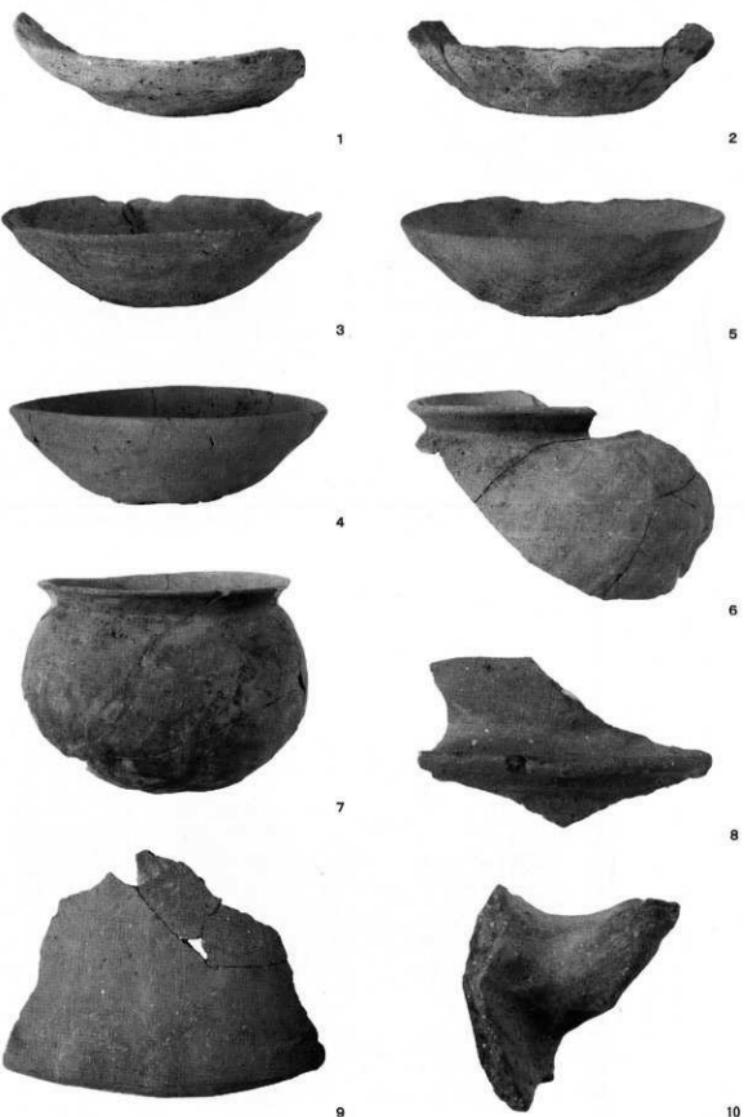


北区 SW301(南から)



北区 SW302(西から)

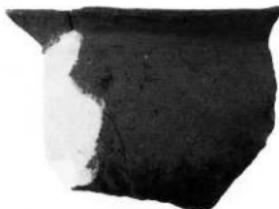
圖版一〇



SK108(1~7)、SK109(8~10)出土遺物



11



23



13



24



17



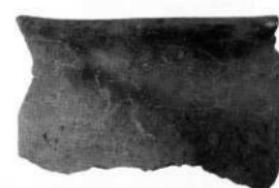
18



25



12



26



22



27



28



32



36



37



35



38



—



34

S K112(28・32)、S K201(34・35)、S K203(36～38)出土遺物



39



40



41



42



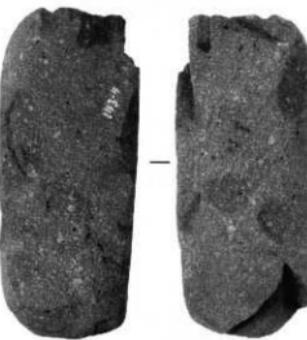
43



44



45



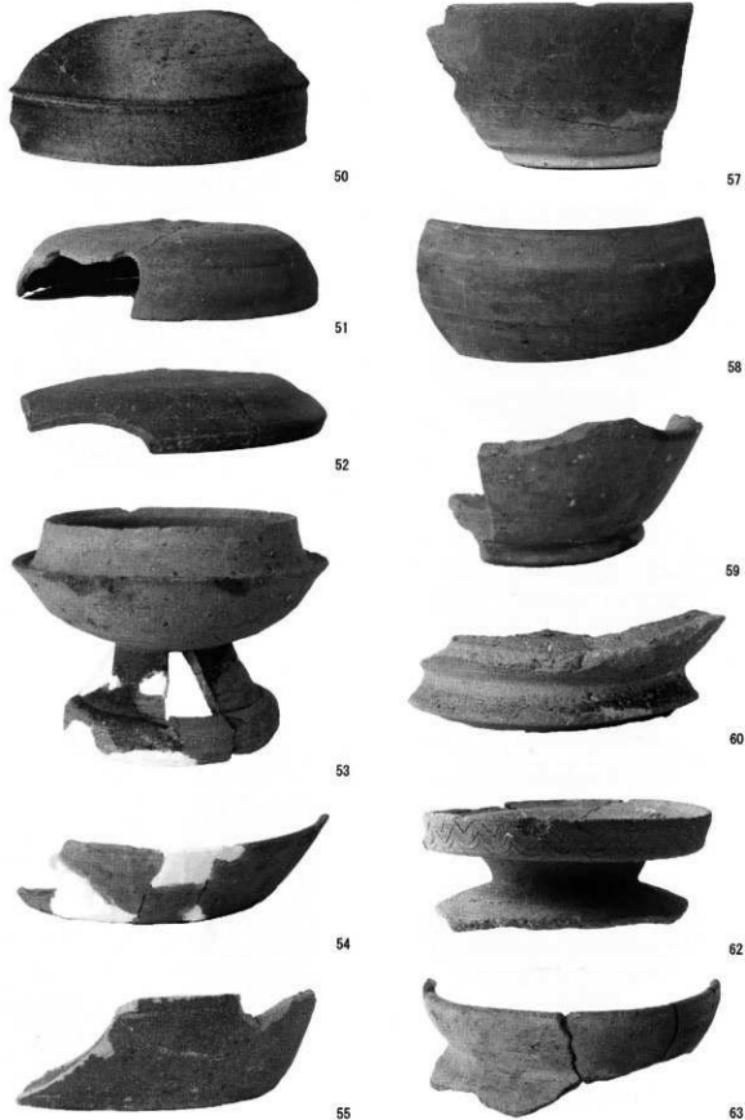
46



47

S K204 (39~44)、S P216 (45~47) 出土遺物

圖版一四



S O 202(50~55・57~60)、N R 201(62・63)出土遺物



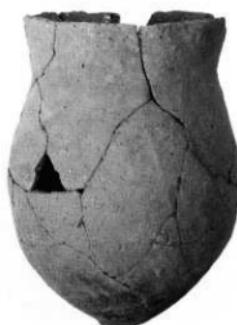
64



70



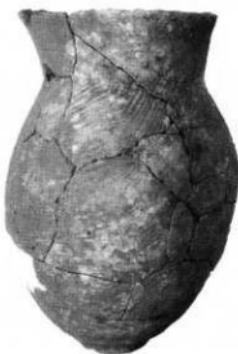
66



69



67



68



71



N R 202 (64・66~70)、N R 203 (71) 出土遺物

圖版一六



72



74



73



75



76

S K 302(72~76) 出土遺物



78



81



79



82



80



83



87



85

S K304(78)、S K306(79・80)、S D308(81・82)、S D310(83・85)出土遺物

圖版一八



89



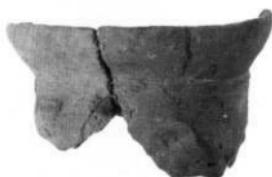
95



90



96



92



93



97

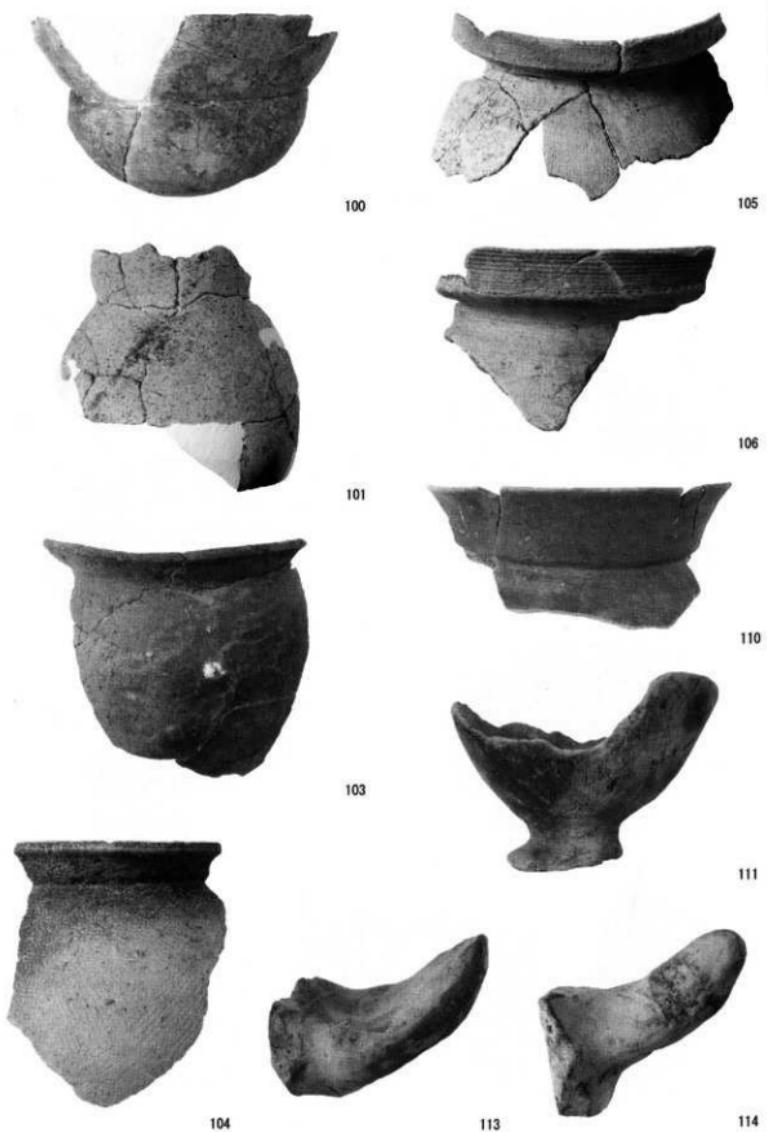


94



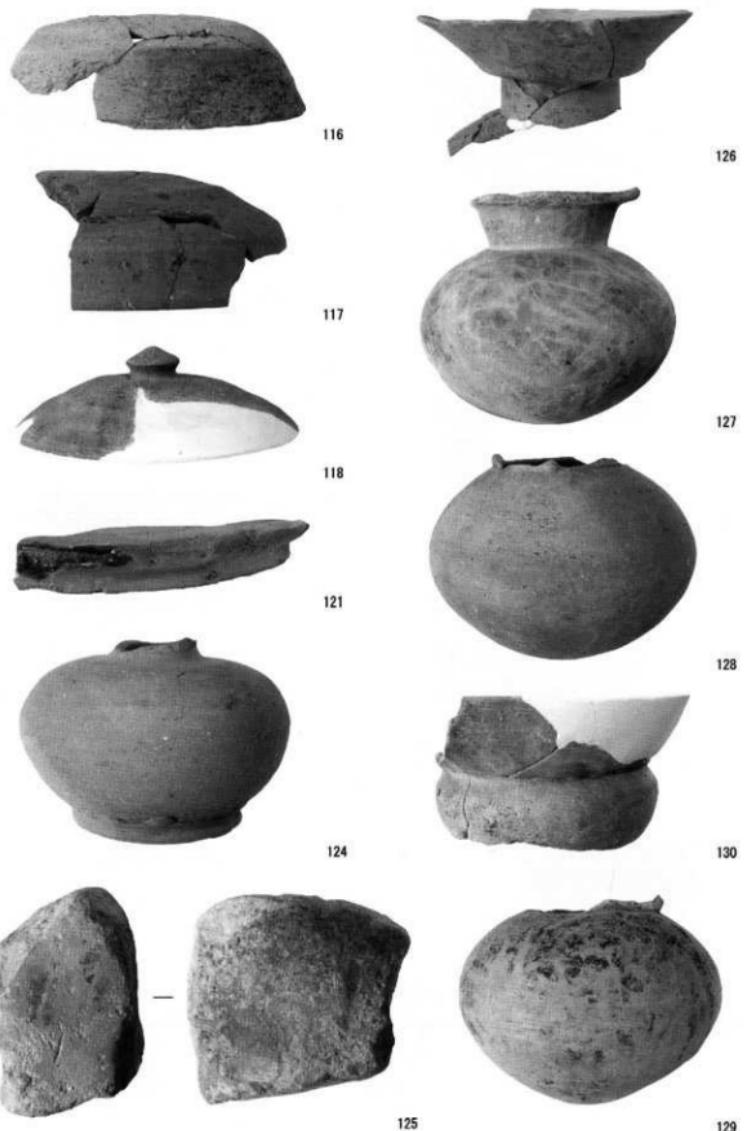
98

S D310(89・90)、S W301(92～96)、S W302(97・98)出土遺物

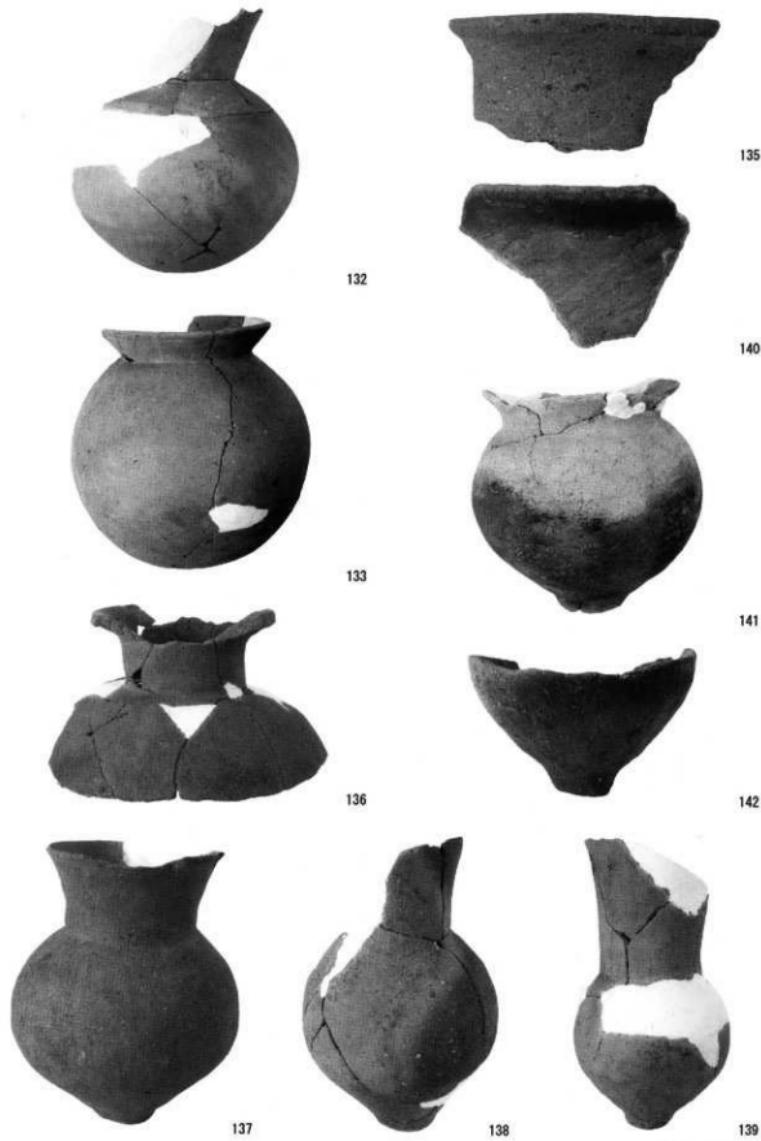


第三層出土遺物

圖版二〇



第三層(116~118・121・124・125)、第六層(126~130)出土遺物



第VI層出土遺物

III 東鄉遺跡第60次調查 (T G 2003-60)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市桜ヶ丘三丁目 84・87・88・90 で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第60次(T G 2003-60)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成15年5月6日～6月11日(実働23日間)にかけて、樋口　薰を調査担当者として実施した。調査面積は約450m²である。
1. 現地調査にあたっては、飯塚直世・市森千恵子・岩本順子・鈴木裕治・中野靖之・實樹婦美子・横山妙子の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成22年1月末に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測一飯塚・市森・岩沢玲子・北原清子・國津れいこ・鈴木・田島宣子・徳谷尚子・永井律子・中野・中村百合・實樹・村井俊子・村田知子・若林久美子、図面トレースー市森・徳谷・樋口・山名康子、写真撮影ー樋口、写真編集ー山名、本書の執筆及び編集ー樋口が担当した。

目　　次

第1章 位置と環境	103
第1節 地理的環境	103
第2節 歴史的環境	103
第2章 調査に至る経緯と経過	105
第1節 調査に至る経緯	105
第2節 調査の経過	105
第3章 調査の方法	105
第4章 調査成果	106
第1節 基本層序	106
第2節 検出遺構と出土遺物	109
第5章 まとめ	137

挿図目次

第1図 調査地周辺図	103
第2図 調査区地区割図	105

第3図 地層断面図	107-108
第4図 SK103平・断面図	109
第5図 1区平面図	110
第6図 SK103出土遺物 1	111
第7図 SK103出土遺物 2	112
第8図 SK104・105断面図	113
第9図 SK106平・断面図	113
第10図 SK105・106出土遺物	114
第11図 SK107平・断面図 出土遺物	114
第12図 SK108平・断面図 出土遺物	115
第13図 SK110平・断面図 出土遺物	116
第14図 SK112平・断面図 出土遺物	116
第15図 SD102出土遺物	117
第16図 SD103出土遺物	117
第17図 SD104出土遺物	118
第18図 SD103・104断面図	118
第19図 2区平面図	119-120
第20図 SE201断面図	121
第21図 SE201出土遺物	121
第22図 土器集積201出土遺物	122
第23図 SK204平・断面図	122
第24図 SK215・222・229平・断面図 SK204・215・222・229出土遺物	123
第25図 SK231・233平・断面図 出土遺物	125
第26図 SK236・238平・断面図	126
第27図 SK236・238出土遺物	126
第28図 SK242平・断面図 出土遺物	126
第29図 SK243・244平・断面図 SK243・244・246出土遺物	127
第30図 SK246・255平・断面図 SK255出土遺物	128
第31図 SD201出土遺物	128
第32図 SD202平・断面図	129
第33図 SD202出土遺物	130
第34図 SD203平・断面図 出土遺物	131
第35図 SD204平・断面図 出土遺物	132
第36図 1区Ⅲ層内出土遺物	133
第37図 1区遭構面検出時出土遺物	135
第38図 2区遭構面検出時出土遺物 1	136
第39図 2区遭構面検出時出土遺物 2	137

表 目 次

表 1 既往調査一覧表

104

図版目次

- 図版一 1区全景(南から) 1区全景(南東から) 1区全景(東から)
- 図版二 SK103(北東から) SK103(北東から) SK103(南西から)
- 図版三 SK106(東から) SK107(南から) SK108(南東から)
- 図版四 SK110(南から) SK112(北から) 1区東壁(西から)
- 図版五 2区全景(北東から) 2区全景(北から) 2区全景(北西から)
- 図版六 SE201(北東から) SK242(東から) SD201(北東から)
- 図版七 SD202(西から) SD203(南から) 2区南壁(北西から)
- 図版八 1区出土遺物
- 図版九 1・2区出土遺物
- 図版十 2区出土遺物
- 図版十一 1・2区出土遺物
- 図版十二 2区出土遺物

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する柏原市役所付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に囲まれた低地である。この平野は、旧大和川の主流（恩智川・玉串川・楠根川・長瀬川・平野川）と分流がもたらす冲積作用により、自然堤防や後背湿地などのヒトの営みには必要不可欠な自然地形を形成しながら、その姿を幾度か変えつつ、現在に至る。この平野の東部に位置する八尾市は、東側を奈良県、西側を大阪市、北側を東大阪市にそれぞれ隣接し、また南側は、柏原市のほか、1704年以降その流れを西へと転じた現大和川を境界として、松原市や藤井寺市に接している。

今回報告する東郷遺跡は、本市のほぼ中央、現在の行政区画では、本町一・七丁目、東本町一～五丁目、北本町二丁目、光町一・二丁目、桜ヶ丘一～四丁目、莊内町一・二丁目の東西約1.1km、南北約0.9kmがその範囲と推定されている。地形的には、旧大和川の主流である楠根川の左岸、長瀬川の右岸に形成された沖積地上に立地する。現地表面高を見ると、遺跡南東端がもっとも高く標高8.5m前後、北西端がもっとも低く標高6.7m前後を測る。比高差は約1.8mであり、概ね南東から北西方向に傾斜する地勢を有している。

第2節 歴史的環境

当遺跡は、昭和46年に東本町二丁目において水道管敷設工事が行われた際、現地表下約1.5m



第1図 調査地周辺図

で墨書人面土器等が出土し（西岡1977）、その存在がはじめて確認された。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当研究会による多次にわたる調査の結果、弥生時代中期～近世に至る複合遺跡として認識されるようになった。特に、古墳時代初頭～前期の遺構・遺物が濃密に分布しており、当該期の大規模な集落として注目されている。

東郷遺跡の北東隅に位置する今回の調査地周辺を見ると、南東へ約50mの地点において当研究会による第1次調査（TG80-01）が行われている。ここでは、古墳～鎌倉時代の井戸、土坑、溝などを検出した（高萩1981）。特に井戸内からは平安時代前期に属する黒色土器碗が、重なった状態で2個体出土したほか、同時期の建物を構成した可能性の高い柱穴を検出するなど、当該期の居住域の存在を肯定する有力な成果を得た。また古墳時代後期に比定される須恵器杯身や高杯を、埋置あるいは投棄した土坑も検出されていることから、この時期の遺構群の存在も注目される。また平成18年には、西へ約120mの地点で当研究会による第64次調査（TG2006-64）が実施され

表1 既往調査一覧表（地図番号は第1図に対応）

地図番号	調査名（略号）	所在地	面積（m ² ）	調査機関	文献
TG1	東郷第1次（TG80-1）	桜ヶ丘三丁目8-1・8-9	82	市教委	高萩千秋 1981「東郷遺跡発掘調査概要」『八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要』八尾市文化財調査報告6 昭和56年度四庫補助事業』八尾市教育委員会
TG2	東郷第2次（TG2）	桜ヶ丘三丁目7-8-1	9	市教委	米田敏幸 1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市文化財発掘調査報告書2』八尾市文化財調査研究会報告2
TG7	東郷第7次（TG81-7）	桜ヶ丘三丁目	200	市教委	米田敏幸 1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市文化財発掘調査報告書2』八尾市文化財調査研究会報告2
TG11	東郷第11次（TG82-11）	光町二丁目	500	八文研	高萩千秋 1989「第11章 東郷遺跡第11次調査」『昭和63年度八尾市文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告17 (財)八尾市文化財調査研究会
TG13	東郷第13次（TG13）	桜ヶ丘三丁目32-3	200	八文研	高萩千秋 1989「第13章 東郷遺跡第13次調査」『昭和63年度八尾市文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告17 (財)八尾市文化財調査研究会
TG22	東郷第22次（TG86-22）	桜ヶ丘一丁目25・26	112.5	市教委	米田敏幸 1987「東郷遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告15 八尾市教育委員会
TG24	東郷第24次（TG87-24）	桜ヶ丘三丁目124-1	258	八文研	高萩千秋 1991「第3章 第24次調査」『東郷遺跡-第23章・第24次発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告29 (財)八尾市文化財調査研究会
TG29	東郷第29次（TG88-29）	光町二丁目28-1他3筆	220	八文研	西村公助 1989「第29次調査」『八尾市文化財調査研究会報告25』(財)八尾市文化財調査研究会
TG38	東郷第38次（TG91-38）	光町二丁目5光町公園内	9	八文研	岡田清一 1992「第1章 東郷遺跡第38次調査(TG91-38)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告34 (財)八尾市文化財調査研究会
TG45	東郷第45次（TG93-45）	桜ヶ丘三丁目45・49	200	八文研	岡田清一 1995「IV 東郷遺跡(第49次調査)」『東郷遺跡』八尾市文化財調査研究会報告48 (財)八尾市文化財調査研究会
TG49	東郷第49次（TG95-49）	光町二丁目2-22	140	八文研	原田昌則 1996「IV 東郷遺跡(第49次調査)」『東郷遺跡』八尾市文化財調査研究会報告54 (財)八尾市文化財調査研究会
TG64	東郷第64次（TG2004-64）	光町二丁目3・4・6・7・8番	12160	八文研	坪田真一郎 2006「22. 東郷遺跡第64次調査(TG2005-64)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
府1	一級河川補修工事	桜ヶ丘・旭ヶ丘	7980	府教委	東郷遺跡発掘調査概要、I-八尾市桜ヶ丘・旭ヶ丘所在
市1	94-730	桜ヶ丘二丁目206・207	20	市教委	みなもと道 1996「I. 東郷佑寺(94-730)の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告33 八尾市教育委員会

*調査機関=府教委：大阪府教育委員会 市教委：八尾市教育委員会 八文研：(財)八尾市文化財調査研究会

た。この調査は、総面積が約1万m²を超える大規模なもので、古墳時代前期の墓域を検出したほか、木製盾などの木製品を多量に投棄した溝を検出するなどの成果を得た(坪田他 2006)。

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成15年4月7日、当研究会は、八尾市教育委員会より示された共同住宅建設に伴う発掘調査指示書を受理した。申請地は八尾市桜ヶ丘三丁目84・87・88・90である。

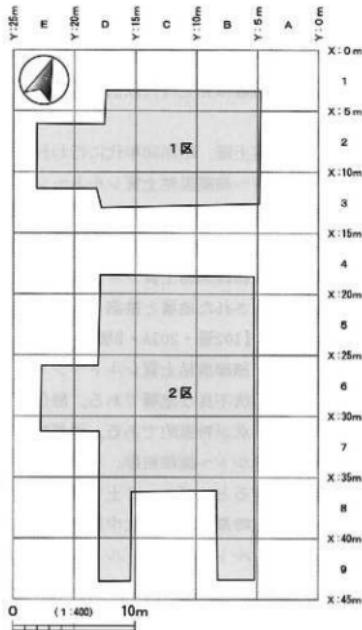
申請地は、東郷遺跡の北東部に位置する。東郷遺跡は、先述の通り弥生時代中期以降の複合遺跡である。特に弥生時代前～中期の居住域、墓域に伴う遺構・遺物を多く検出し、市民に広く周知されてきた遺跡である。このような状況下、平成15年5月1日、当研究会は、八尾市教育委員会および申請者との3者による、共同住宅建設に伴う東郷遺跡発掘調査の業務協定を締結した。調査は、八尾市教育委員会の指導のもと、当研究会が実施する運びとなった。調査期間は、平成15年5月6日～6月11日で、調査実働日数は23日に及んだ。

第2節 調査の経過

今回の発掘調査は、当研究会が東郷遺跡内で実施した第60次調査にあたる。調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、工事で破壊される基礎杭部分と地下駐車場部分について、現地表(T.P.+8.6m前後)下1.3～2.0mまでを機械と人力を併用して掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。調査区は2ヶ所(北から1・2区)、調査総面積は約450m²を測る。

第3章 調査の方法

調査では、遺構・遺物の検出・出土位置を明確にするために地区割を行った。地区割は、まず調査地北側の土地境界ライン上を仮の東西軸(Y軸)とし、そのライン上の内、1・2区を包括する地点(調査地北東隅付近)に任意の基準点(X:0m・Y:0m)を設定することから始めた。この基準点と仮の東西ラインを元に南北軸(X軸)を決定し、5mごとに区



第2図 調査区地区割図

画を行ったのが、第2図である。地区名は、X軸を算用数字(北から1～9)、Y軸をアルファベット(東からA～E)で表現し、1 A～9 E区と呼称した。なお、この地区割によると、1区は1 A～C・2 A～E・3 A～E区に、2区は4 B～D・5 B～D・6 B～E・7 B～E・8 B～D・9 B・D区に相当する。

遺構名については、遺構略号と3桁の算用数字で表示した。この内算用数字については、上1桁は調査区番号を表し、それ以下の桁で遺構検出番号を示す。

調査の結果、現地表下1.7m(T.P.+6.9m)前後のV層上面において古墳時代初頭～中世の遺構群(井戸1基・土器集積1基・土坑68基・溝9条・柱穴2個)を検出した。出土遺物は、古墳時代初頭～前期の古式土師器を主体にコンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)20箱を数える。

第4章 調査成果

第1節 基本層序

現地表(T.P.+8.6m前後)下0.8m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)であった。以下、現地表下2.0mまでの1.2m間において、I～VI層の基本層序を確認した。I層は、昭和50年代に行われた区画整理事業直前の水田耕作土層に相当する。II～IV層は古墳時代中期～近世の整地層の可能性が高い。V層は古墳時代初頭以前に形成された湿地性堆積層で、上位は土壤化が顕著である。VI層は弥生時代以前の河川堆積層に相当する。以下、各地層の特徴を述べる。

0層 客土・盛土層。昭和50年代に行われた区画整理事業に伴う整地層である。【100層・200層】

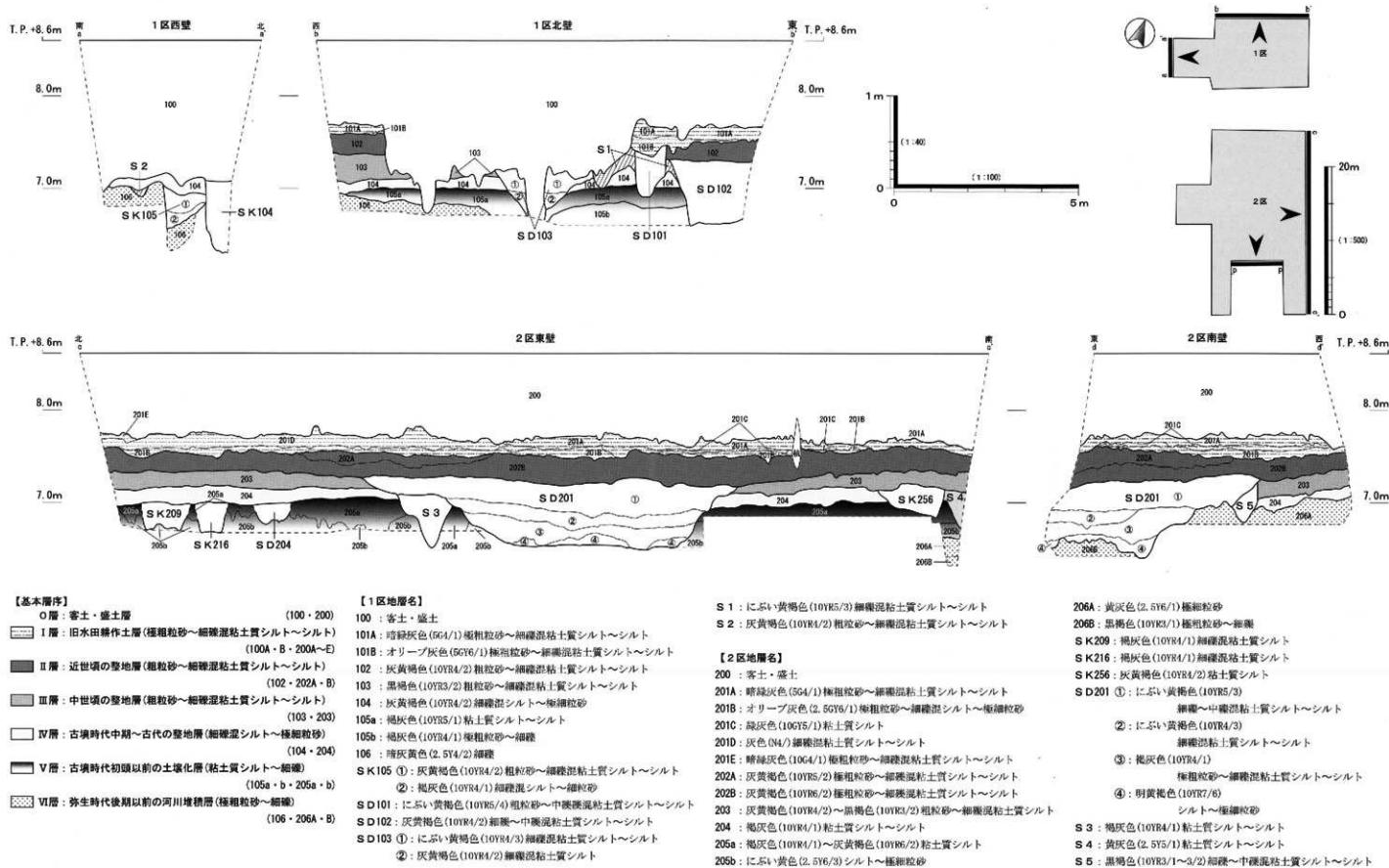
I層 極粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト。昭和50年代に行われた区画整理事業直前の水田耕作上層である。基本的にはグライ化が顕著な淘汰不良な地層である。複数に細分できた。【101A・B層・201A～E層】

II層 粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト。土器細片が混在する淘汰不良な地層である。人工的に形成された地層と推測され、整地層の可能性も考えられる。形成時期は、近世に比定される。【102層・202A・B層】

III層 粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト。土器細片が非常に多く混在する地層である。II層同様、淘汰不良な地層である。酸化マンガンが雲状に沈着しているため、地層全体が赤茶けている点が特徴的である。帰属時期は中世頃と推測される。【103層・203層】

IV層 細礫混シルト～極細粒砂。本層も土器細片が混在する淘汰不良な地層である。地層を詳細に観察すると、ブロック土で形成されており、II・III層同様、整地層の可能性が考えられる。形成時期は古墳時代中期～古代と考えられる。【104層・204層】

V層 粘土質シルト～細礫。シルト優勢の水成層である。後で解説するVI層の東側に堆積した後背湿地性の堆積層と推測される。古墳時代初頭以前に形成されたものと考えられる。なお、本層の上面は、土壤化が進行しており、一時期の生活面であった可能性が高い。したがって本調査では、この土壤化部分(105a・205a層)と、土壤化の影響を受けず、本来の堆積構造が残っている部分(105b・205b層)とに分類した。【105a・b層・205a・b層】



第3図 地層断面図

VI層 極粗粒砂～細礫。本調査地の西部を南東～北西方向に伸びる砂礫優勢の河川堆積層である。断面を確認すると、かまぼこ状に盛り上がっている。おそらく、南東から北西方向に舌状に発達した自然堤防を形成している砂礫層であろう。砂礫は、2～3cm大のものが多く含まれており、一見すると、扇状地性の堆積層のようである。弥生時代後期以前に形成されたことが推測される。【106層・206A・B層】

第2節 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、時間的な制約があったことから、各調査区ともに現地表下1.7m (T.P. + 6.9m) 前後のV層(105b層・205b層)上面において検出した遺構面を調査対象とした。調査の結果、1区では土坑12基(S K101～S K112)、溝4条(S D101～S D104)を、2区では井戸1基(S E201)、土器集積1基(土器集積201)、土坑56基(S K201～S K256)、溝5条(S D201～S D205)、柱穴2個(S P201・S P202)を検出した。出土遺物は、コンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)20箱を数える。

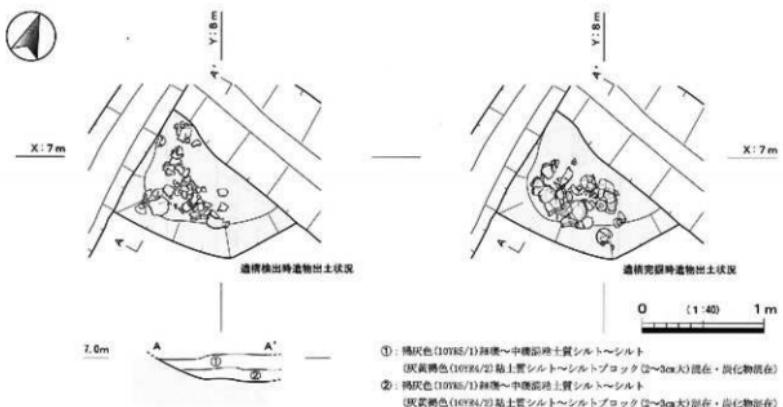
1 検出遺構

土坑(S K)

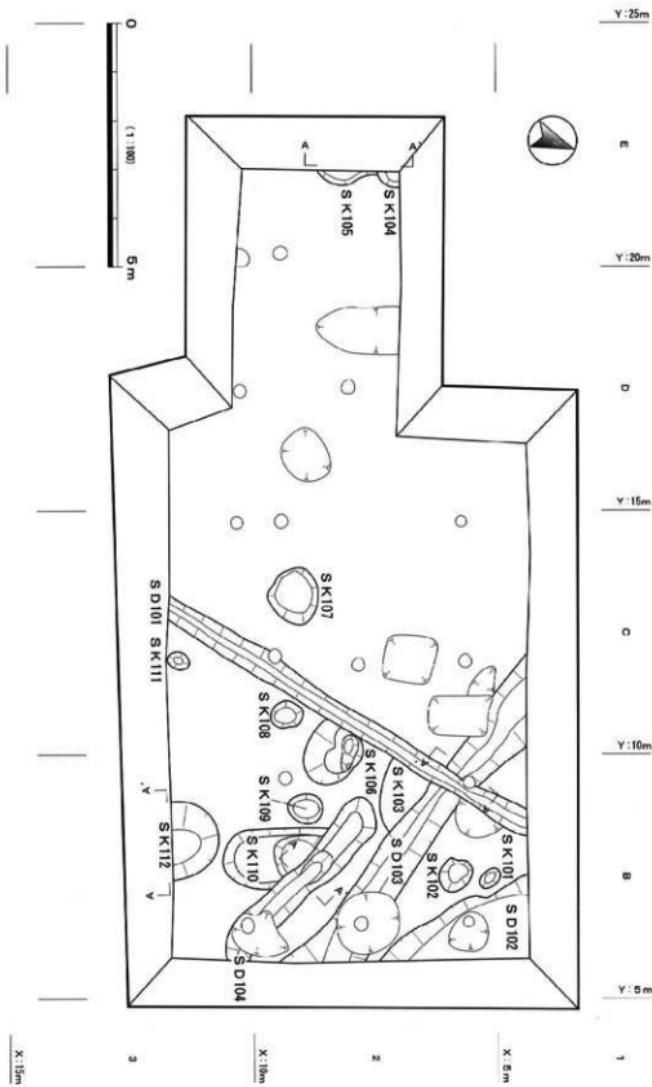
12基の土坑の内、大部分は調査区の東部で検出した。いずれも、平面形状は円形～不定形を、断面形状は浅いレンズ形～逆台形を呈する。深さは0.2m未満のものがほとんどである。埋土は、色調に若干のばらつきが認められるものの、概ね細礫混粘土質シルト～シルトのブロック土の単層である。いずれの土坑からも出土遺物が乏しいことから、遺構の帰属時期を推測することは難しいが、概ね古墳時代前～後期の所産であろう。以下では、特筆すべき土坑の概説を行う。

S K103

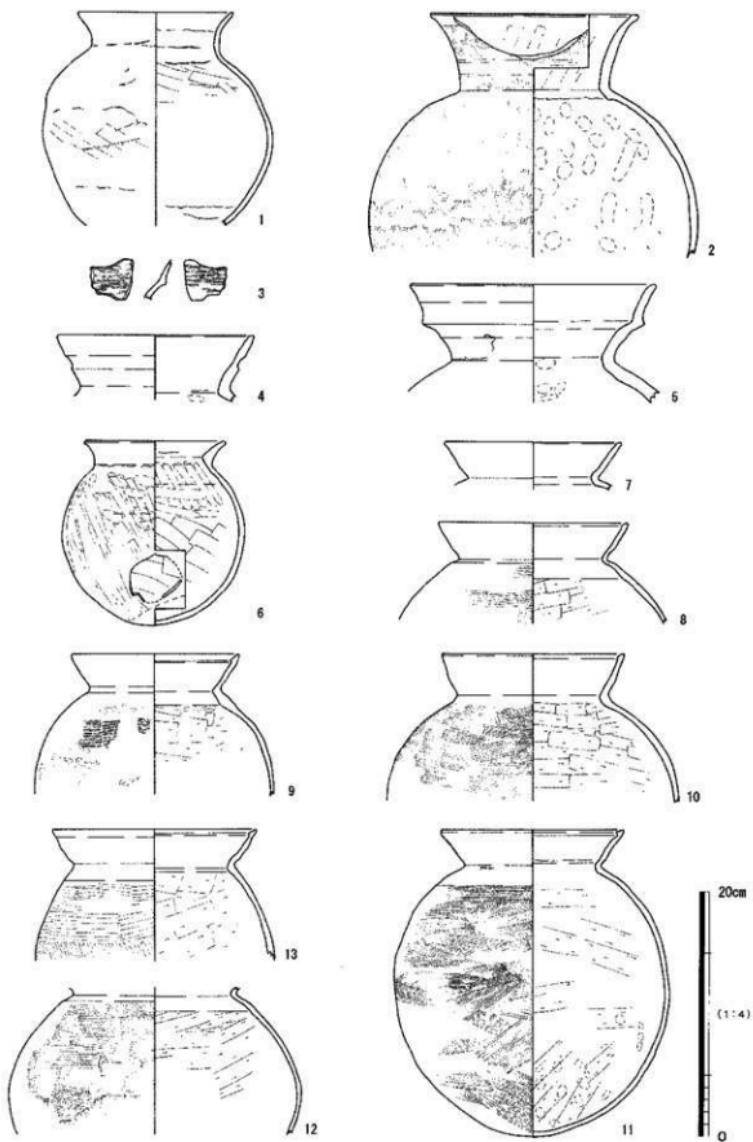
1区北東部(2B区)検出の土坑である。本土坑の北西部はS D101に、北東部はS D103に切られるため全容は不明。検出規模は西北西～東南東長1.3m以上、北北東～南南西長0.9m以上であ



第4図 SK103平・断面図



第5図 1区平面図

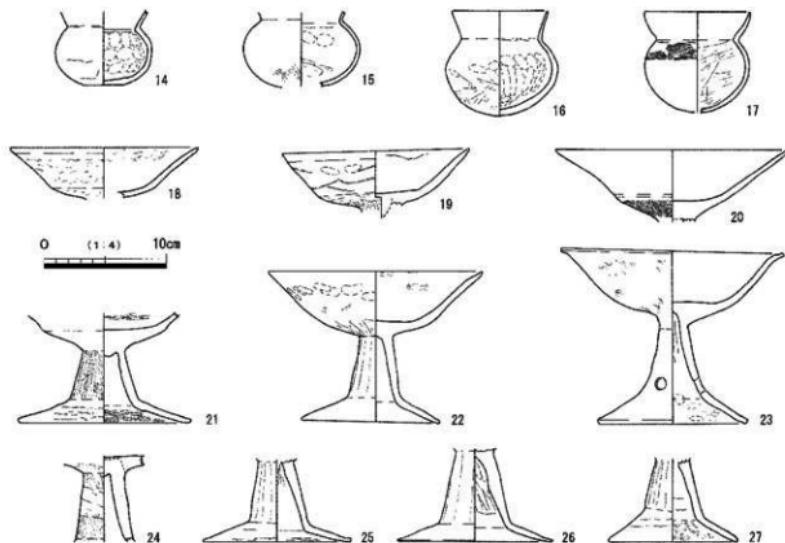


第6図 SK103 出土遺物 1

る。深さは0.3mで、断面形状は浅いレンズ形を呈する。埋土はブロック土が充填されており、2層に区分できた。

本土坑からは、古式土師器が多量に出土した。土器群は、壺・甕・高杯・小型丸底土器で構成されており、概ね3層に積み重ねたような状態で出土した。この内壺や高杯は、口縁部を下に向かえたものが多く、甕については、口縁部を東に向けた横臥状態の個体が認められる点が注目される。このような出土状況から勘案すると、投棄された土器群というよりは、何らかの規格をもとに埋置された土器群の可能性が高い。以下、遺物の概説を行う。

1～5は壺である。1は短頸壺。外反する口縁部と丸い端部を有し、頸部内面の屈曲は鈍い。指頭成形後板ナデ調整を施す。2は広口壺である。外面はハケナデ。口縁端部には焼成後に打ち欠きを行う。3～5は二重口縁壺。3は口縁部細片か？内・外ともに横位ミガキを施す。4・5は山陰地域からの搬入品の可能性が考えられる。6は小型甕。球形を成す体部下位には焼成後に行われた穿孔が1ヶ所ある。7～13は甕。ほぼ直線的～若干内湾しながら上外方に開く口縁部と、内厚する端部をもち、頸部内面の屈曲が横ナデにより鈍角を成す個体である。体部外面調整は、概ね右上りタタキ後ハケナデを行う。内面はケズリ。この内、全体の形状が判明した11を見ると、体部の長胴化が認められる。14～17は小型丸底土器。この内、14・15は体部が若干扁平である。14には小さい平底が形成される。16・17は体部が球形に近い。17は外面のミガキ調整が丁寧に施されており、精製品である。18～27は高杯。杯部より上位の残存する18～23については、いずれも後の退化が認められる有稜高杯である。柱状部以下の確認できた21～27を見る



第7図 SK103出土遺物 2

と、いずれも柱状部と裾部の境界には変化点が認められる。裾部の開きは概して大きい。

以上の土器群は、概ね米田編年の布留IVの特徴を有することから、古墳時代前期(布留式期新相)に帰属時期を求めることが可能である。

S K105

1区西端(2E区)検出の南北に長い不定形を呈した土坑(北北西-南南東軸: 1.1m以上、西南西-東北東軸: 0.3m以上)である。構造の北部をSK104に切られるほか、西部は調査区外に至るために、全容は不明。深さは0.4mで、断面形状は浅いレンズ形を呈する。埋土はブロック土で、2層に区分できた。

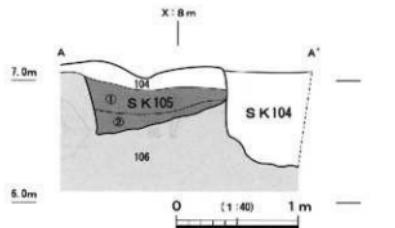
遺物は、弥生土器や古式土器細片が散点出土した。28は弥生土器長頸壺の体部である。断面形状がM字形を呈する凸帶を貼り付け、その上面にキザミ文様を加える。弥生時代後期の所産である。29は古式土器壺の体部最下位~底部。底部は突出せず、平底を成す。30は古式土器小型丸底土器(精製品)。外面には横位ミガキを密に施す。

S K106

1区中央やや東(2B・C区)検出の土坑。

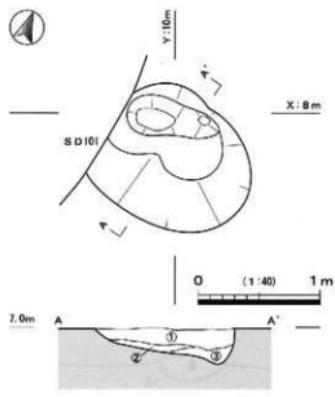
本土坑の西部部分はSD101に切られるため全容は不明であるが、東-西に主軸をもつ梢円形へ隅丸方形(長軸: 1.2m以上、短軸: 1.1m)を想定したい。深さは0.3mで、断面形状は浅い不定形を呈する。埋土はブロック土が充填されており、3層に区分できた。

遺物は、土器類や須恵器の細片が数点出土した。この内31は土器羽釜鋸部である。32は先端を上外方に短く伸ばした土器把手である。33・34は天井部が若干丸みを持つ須恵器杯蓋。この内33は、断面三角形の稜を有し、口縁端部には外傾する段を形成する個体。調整は、口縁部~天井部下2/3までは回転ナデ、以上は回転ヘラケズリを施す。5世紀後半の所産と推定される。34の天井部外面には格子状のヘラ記号が刻まれる。



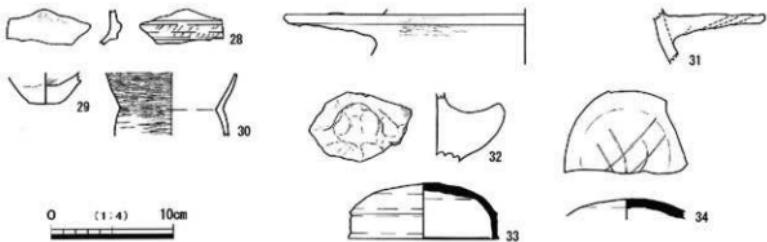
- SK104** : にべい黄褐色(10YR4/3)細繊維板細粒砂～粗粒砂ブロック(3～5cm大)
SK105 ①: 黄褐色(10YR4/2)粗粒砂～粗纖維粘土質シルト～シルトブロック(2～3cm大)
 　　(土器細片、灰化物混在)
 　②: 黄褐色(10YR4/2)細繊維シルト～中粗纖維シルト～粗粒砂ブロック(3～5cm大)
104 : 灰褐色(10YR4/2)粗纊維シルト～粗粒砂
106 : 黄褐色(10YR4/1)粗粒砂～粗粒砂

第8図 SK104・105断面図



- ①: 黄褐色(10YR4/2)細繊維～中粗纖維粘土質シルト～シルトブロック
 　　(2～3cm大)(炭化物混在)
 　②: 黄褐色(10YR5/2)シルト～細粒砂ブロック(2～3cm大)
 　③: 黄褐色(10YR5/2)細粒砂～中粗粒砂ブロック(2～3cm大)

第9図 SK106平・断面図

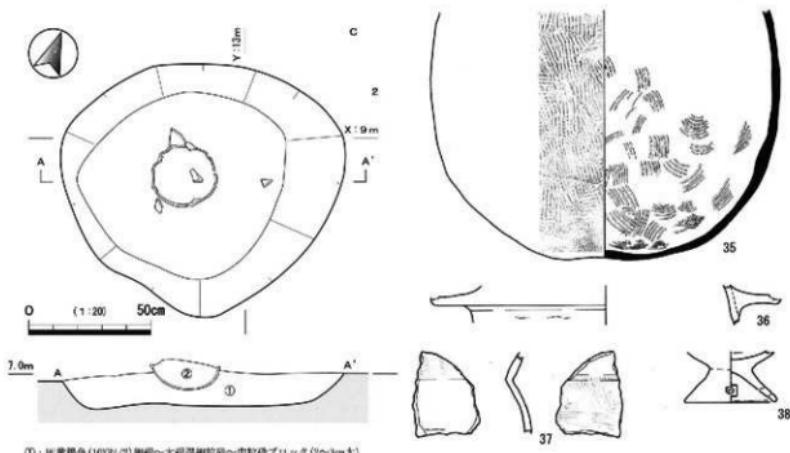


第10図 SK 105・106 出土遺物

SK 107

1区のほぼ中央(2C区)で検出した、西南西—東北東に主軸をもつ楕円形の土坑(長軸1.2m、短軸1.0m)である。深さは0.2mで、断面形状は浅い逆台形を呈する。埋土はブロック土の単層。

本土坑のほぼ中央からは、須恵器壺35が出土した。35は、口縁端部～体部中位までを意図的に打ち欠き、その結果中位以下のみが遺存した個体と推測され、口縁部方向を上に向かた状態で埋置していた。調整は、外面には平行タタキを施し、内面には同心円状具痕が見える。6世紀前半の所産と推定される。35内埋土からは土師器羽釜鉢部細片36が出土した。一方、遺構内埋土には、古式土師器37・38が混入していた。37は壺。口縁部内面には横位ハケナデを施す。肩部外面は左斜位ハケナデ後、横位ハケナデを行う。38は上外方に短く直線的に開く脚台部である。ほぼ円形の透孔を1個確認した。



①: 黄褐色(10YR 4/2)漆緞～大経混紡織物～中粒砂ブロック(0～3cm)

②: にじむ黄褐色(10YR 5/3)漆緞～大経混紡土質シルトシルト
ブロック(0～3cm)(須恵器内埋土)

第11図 SK 107平・断面図 出土遺物

S K108

1区の中央やや東より(2C区)で検出した土坑である。平面形状は、南南東一北北西に主軸を有する楕円形(長軸: 0.7m、短軸: 0.5m)である。深さは 0.1m を測り、断面形状は浅いレンズ形を成す。埋土はブロック土の単層であった。

本土坑のほぼ中央からは、口縁部を意図的に下に向けて埋置した須恵器すり鉢(39)が出土した。39は、口縁端部に外傾する平坦面を形成し、底面が若干凸に膨らむ個体である。体部外面はカキ目、底面は板ナデを施す。6世紀前半の所産と推測される。

S K110

1区の東部(2B・3B区)で検出した土坑である。遺構の北部はSD104に切られるため全容は不明。概ね南南東一北北西に主軸をもつ圓丸方形(長軸: 2.7m以上、短軸: 1.2m)であったと推測される。遺構の北部には、二段掘りによる段落ちを確認した。深さは 0.5m で、断面形状は浅い逆台形。埋土はブロック土が充填されており、5層に区分できた。

遺物は、古式土器40・41や須恵器42などの細片が出土した。40は甌。口縁部は外反し、端部は上方に若干拡張する。口縁部内面には横位ハケナデを施す。41はミニチュア高杯の裾部。裾部は外反し、端部は丸い。42は杯身。口縁部は外反味に上方に立ち上がる。体部外面調整を見ると、回転ヘラケズリの占める割合が高いと考えられる。

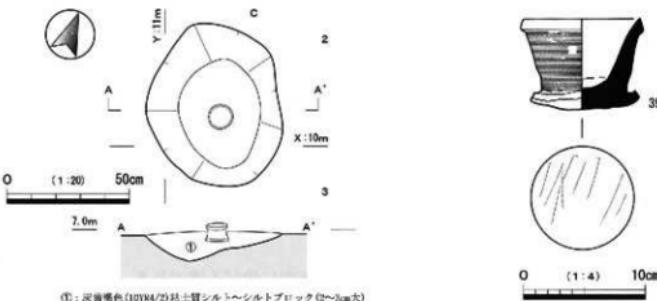
S K112

1区の南東部(3B区)で検出した土坑である。遺構の南部は調査区外に至るため全容は不明であるが、円形を呈した可能性が高い。検出規模は、西南西一東北長 1.9m 以上、北北西一南南東軸 0.9m 以上である。深さは 0.3m で、断面形状は浅いレンズ形を呈する。埋土はブロック土から成り、2層に区分できた。

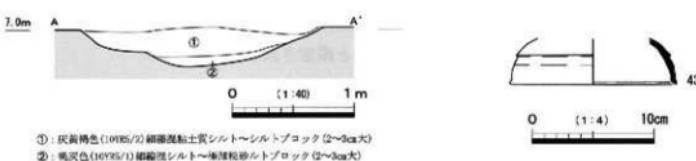
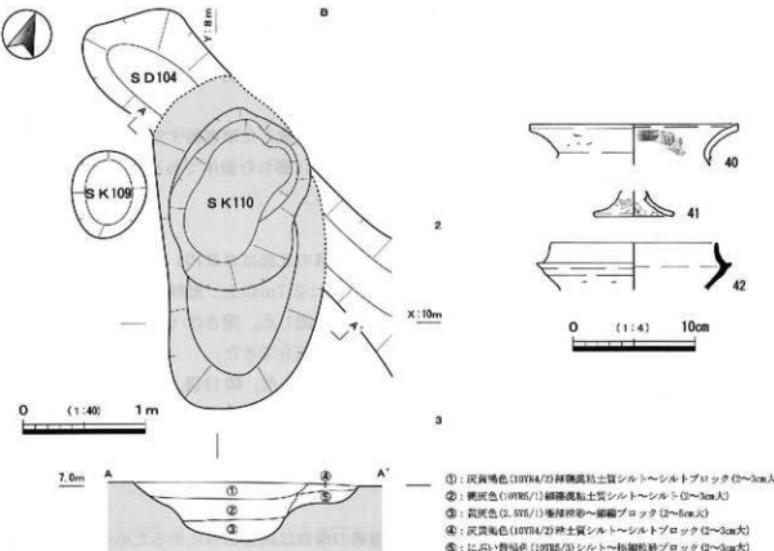
遺物は、須恵器杯蓋細片43が出土した。口縁端部に外傾の段を形成する個体で、縁の退化は著しい。6世紀初頭(中村編年II型式1段階)の所産と推定される。

溝(S D)

調査区の東部において4条の溝を検出した。この内SD101のみ南北方向に伸びるもので、これ以外は南南東-北北西に主軸を有する。各溝の構築基盤層はそれぞれ異なり、SD101はII層上



第12図 S K108平・断面図 出土遺物



面、SD102・103はⅢ層上面、SD104はⅣ層上面に相当する。以下、各溝の概略を述べる。

SD101

1区(1B・2B・C・3C区)検出の、南北方向に直線的に伸びる溝(長さ: 8.6m以上、幅: 0.8m)である。深さは 0.4mで、断面形状はレンズ形を呈する。埋土は、土器片が混在するブロック土の単層である。旧水田耕作土であるⅠ層に帰属する跡溝と推測される。したがって、遺構の帰属時期は近世以降である。

SD102

1区北東隅(1B・2B区)で検出した南南東—北北西方向に伸びる溝である。遺構の北へ東部は調査区外に至るため全容は不明。検出規模は、長さ 4.0m以上、幅 1.5m以上である。深さは

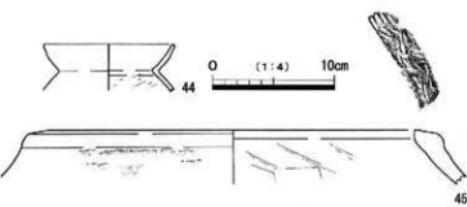
0.7m、断面形状は浅い逆台形を呈する。埋土はブロック土の単層が充填されていた。

遺物は、古式土師器や土師器の細片が少量出土した。この内、44は古式土師器壺である。内湾気味の口縁部と鋭利な屈曲を形成する頭部からなる個体である。45は土師器移動式竈の掛口細片である。掛口端部には若干外傾する幅広の平坦面を形成する。この端面には須恵器壺の内面で認められる同心円当具痕が見える。調整は外面が左斜位ハケナデ、内面が左斜位板ナデである。古墳時代末～飛鳥時代前半に帰属する個体と推測される。

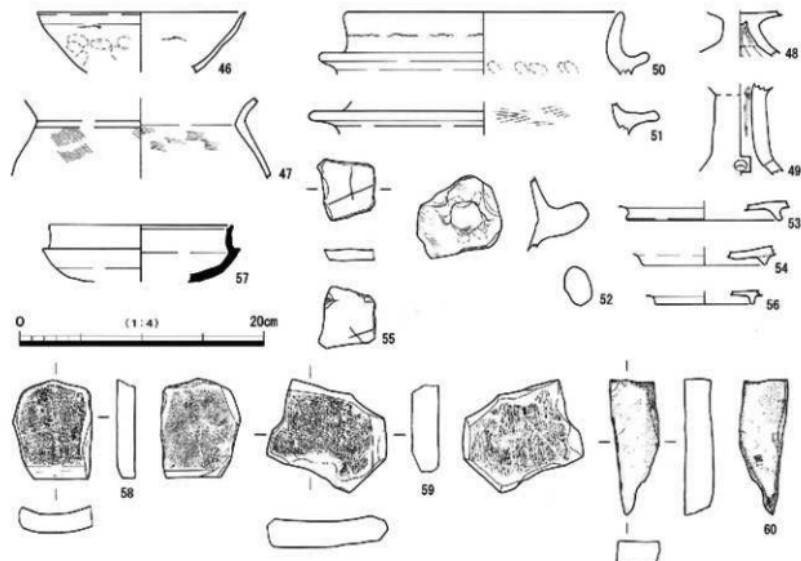
S D103

1区北東部(1B・C・2B・C区)で検出した、東南東～西北西方向に直線的に伸びる溝(長さ: 6.7m以上、幅: 0.7m前後)である。深さは0.4m、断面形状は深いV字形を呈する。埋土はブロック土の単層である。

遺物は、中世を下限とする土師器や須恵器、瓦、石製品の細片が出土した。46～56は土師器。



第15図 SD102出土遺物



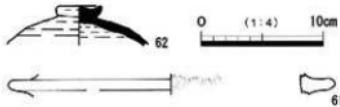
第16図 SD103出土遺物

46は椀。指頭成形後、口縁部付近に横ナデを行う個体で、10世紀前半(佐藤編年平安時代Ⅱ期中)の所産と推測される。47はハケナデ調整が施された甌。48・49は高杯。48は柱脚部が大きく外反する個体である。49は直立する柱状部を有する個体で、裾部との変化点付近には、円形透孔が4方向から穿たれる。50・51は羽釜。概ね口縁部は外反し、肩部に水平な鋸部を巡らす個体で、胎土は生駒西麓産である。8~9世紀前半に属するものと推測される。52は短い牛角状の把手。先端は丸く終りし、外面にはハケナデ調整が行われる。53・54は高台。前者は逆台形の、後者は逆三角形の高台が付く。調整は回転ナデ。55は器種不明。内・外面にヘラ状工具による『×』のような記号文が刻まれる。56は綠釉陶器の高台部。調整は回転ナデ。57は須恵器杯身。口縁部は外反しながら直立し、端部には段をもつ個体である。受部は短い。調整は、杯部外面下位に回転ヘラケズリを施す以外は回転ナデである。中村編年Ⅰ型式4段階と見られる。58・59は平瓦。前者の広端面と広端回線には、それぞれ横位ケズリが行われる。後者の側面と側縁には縦位ケズリにより平坦面が3面形成される。両者ともに凹面には布目が見え、凸面には繩目タタキが施される。中世頃の所産であろう。60は砥石と考えられる石製品。平坦面が4面確認でき、いずれの面にも研磨痕が見える。

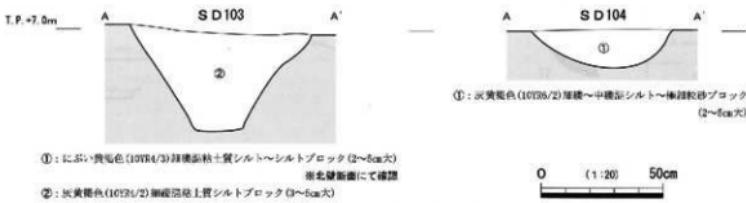
S D104

1区東部(2B・3B区)で検出した溝。SD103の南約0.5mを平行して伸びるもので、長さ4.1m以上、幅約0.6mの規模を有する。深さは0.1mと浅く、断面形状はレンズ形を呈する。埋土はブロック土の単層である。

遺物は、土師器や須恵器の細片が少量出土した。この内図化できたのは2点(61・62)。61は土師器羽釜の鋸部細片で、内面調整は縦位ハケナデである。62は須恵器杯蓋。天井部はドーム形で、頂部には幅広で扁平なつまみが付く。5世紀後半(中村編年Ⅰ型式4~5段階)の所産であろう。



第17図 SD104出土遺物



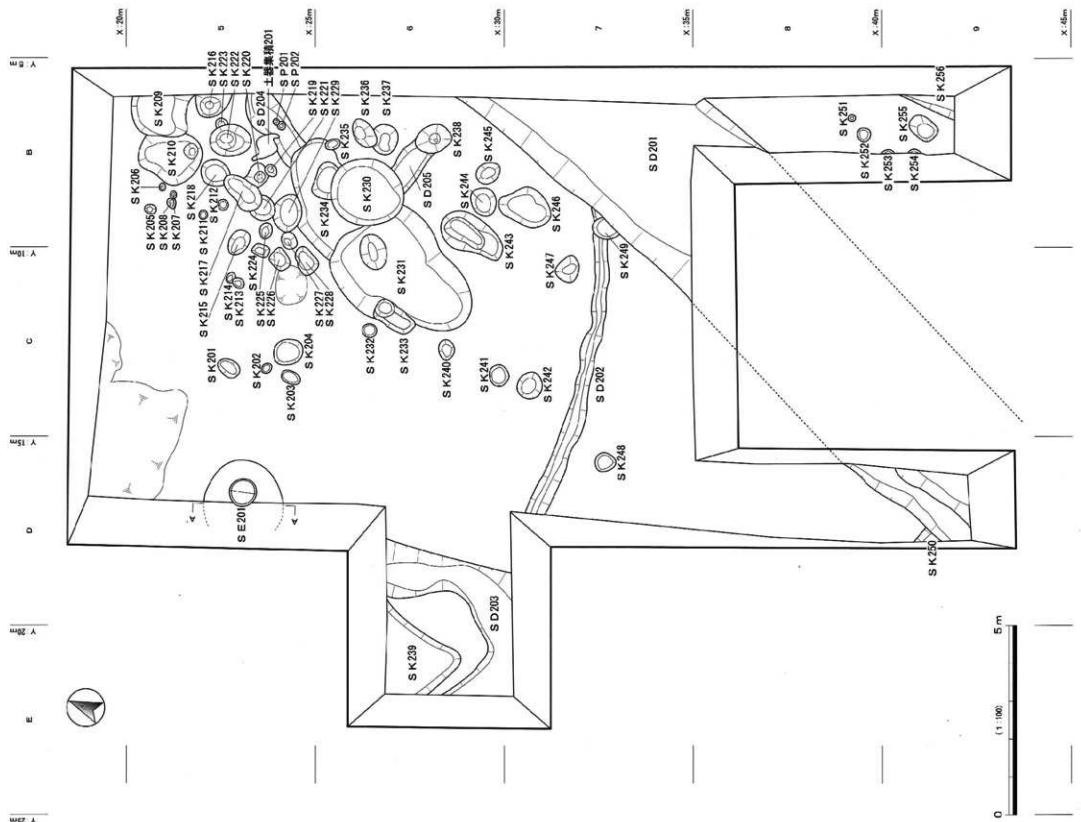
第18図 SD103・104断面図

2区検出遺構

井戸(S E)

S E201

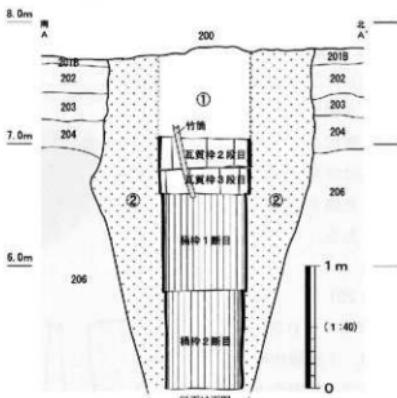
2区北西部(5D区)で検出した近世以降の井戸である。本遺構は、西部分が調査区外に至るた



第19図 2区平面図

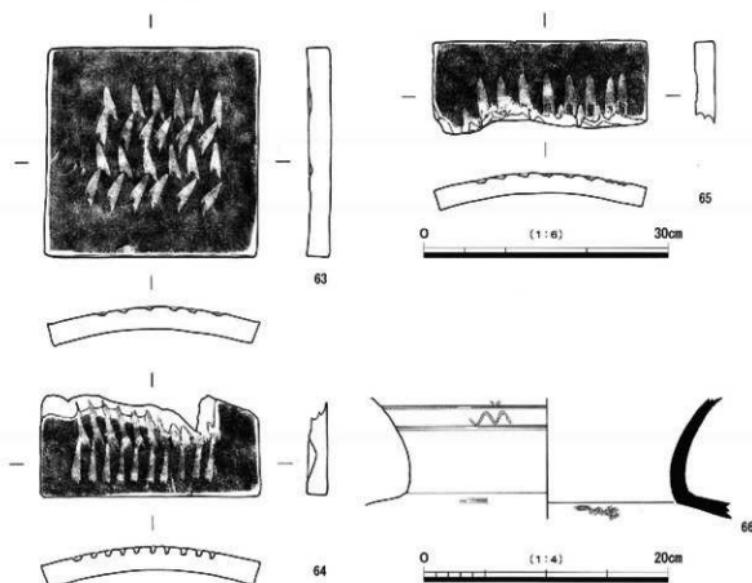
め全容は不明。概ね円形を呈する掘形と中央付近に設置された井戸枠から成る。井戸枠は、1段が10枚の瓦質枠から構成され、これが3段分積み重なっていた。さらにその下位には木製の桶枠が続く。検出規模は、掘形径約2.0m、井戸枠径約0.7mである。深さは2.8mを超える。埋土は、掘形、井戸枠内とともに、ブロック土の単層を充填していた。

63~65は瓦質の井戸枠である。枠は平面形状が1辺約17.0cmの正方形を呈し、断面は緩やかな円弧(中心角度は36度)を描く。厚さは9.0cmである。凸面には楔状のキザミ目が刻印される。刻印は3



①：灰質褐色((0100E/2)シルト～無鉄～ブロック(10~20cm大)(砂内埋土)
②：にぶい黄褐色((0103E/2)細粒風化粘土～無鉄～ブロック(10~20cm大)(砂外埋土)

第20図 S E 201断面図



第21図 S E 201出土遺物

種類認められる。一方、掘形埋土からは須恵器壺の細片(66)が出土した。66は、口縁部が外反する個体で、外面には直線文と波状文が施される。肩部外面にはカキ目が施される。掘形を充填する際に混入した個体である。

土器集積

土器集積 201

2区北東部(5B区)検出の土器集積。1面検出時に確認したもので、掘形などは見つからなかった。概ね東西0.7m、南北0.7mの規格性に乏しい範囲において、須恵器や埴輪が群集して出土した。

図化できたのは、67~69である。67・68は須恵器壺。両者ともに口縁部は大きく外反後、端部を上下に拡張し、内傾の平坦面を形成する。調整は、口縁部が回転ナデ、68の体部外面は格子状タタキ、内面には同心円当具痕(右→左・上→下へと移動している)が見える。69は円筒埴輪の細片。凸帯の断面形状はM字に区分され(樋口2006)、左斜位に施されたハケナデは10本/cmと密である。内面は指ナデ。透孔(おそらく円形)も確認できた。川西編年V期(6世紀初頭~前半)に帰属する。

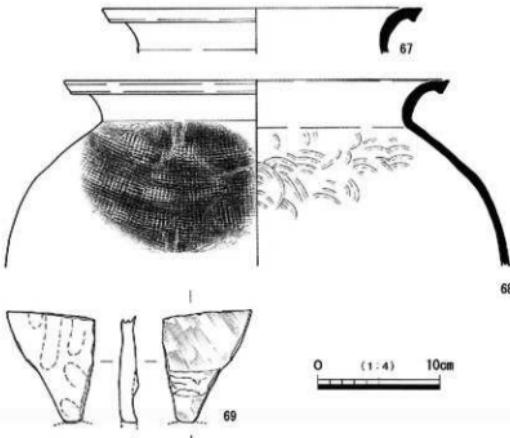
土坑(SK)

56基の土坑内の、大多数を調査区北東部で検出した。

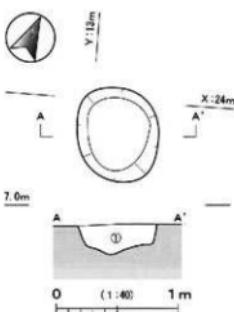
1区検出土坑群同様、平面形状は円形~不定形、断面形状は浅いレンズ形~逆台形を呈する。深さは0.2m未満のものがほとんどである。埋土は、色調に若干のばらつきが認められるものの、概ね細礫混粘土質シルト~シルトのブロック土の単層である。いずれの土坑からも出土遺物が乏しく、遺構の帰属時期を推測することは難しいが、概ね古墳時代前~後期の所産であろう。以下では、特筆すべき土坑の概説を行う。

SK204

2区北西部(5C区)検出の北北西~南南東に主軸をもつ橢円形の土坑(長軸0.7m・短軸0.6m)である。断面形状は不定形で、深さは0.2mを測る。埋土は、土師器細片や炭化物が混在する細礫混粘土質シルト~シルトの単層である。



第22図 土器集積201出土遺物



①: 黒褐色(10YR3/1)細礫混粘土質シルト~シルト
ブロック(2~4cm大)(炭化物混在)(土器細片混在)

第23図 SK204平・断面図

遺物は、土師器製塙土器の口縁端部～口縁部細片(70)が出土した。指頭成形後未調整の個体で、内面にはしばり痕も確認できた。5世紀後半の所産と推測される。

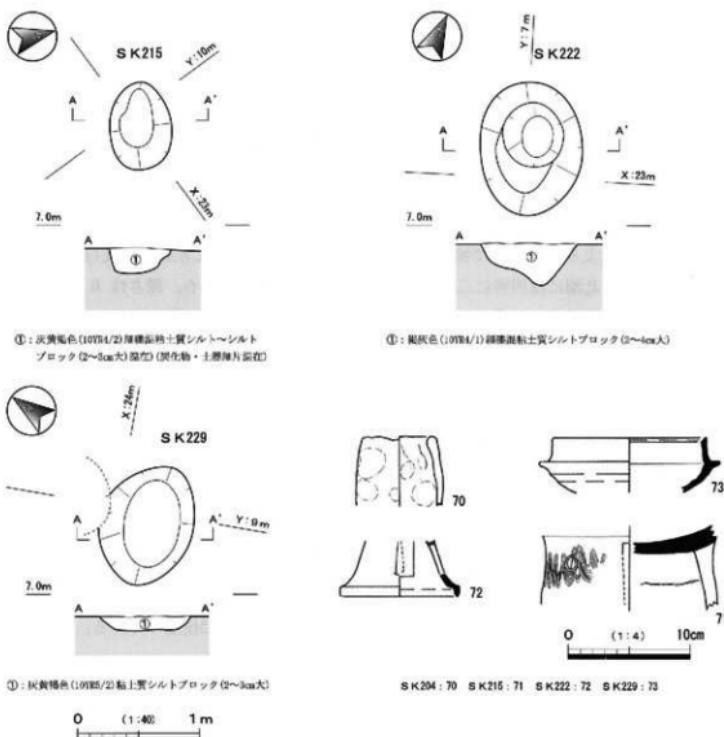
S K215

2区北部(5B・C区)で検出した、西北西～東南東に主軸をもつ梢円形の土坑(長軸約0.7m・短軸約0.5m)である。深さは0.2mで、断面形状は浅い逆台形を呈する。埋土は、土師器や須恵器細片、炭化物が混在する細繊混粘土質シルトの単層である。

遺物は、須恵器器台の杯底部～脚部上位の細片(71)が出土した。71は、脚部外面は回転ナデ後波状文を施し、最後に竹管押圧文を加える。杯内部・裏面には同心円当具痕が見える。脚部には長方形透孔を1個確認した。5世紀後半の所産と推測される。

S K222

2区北東部(5B区)で検出した、北北西～南南東に主軸をもつ梢円形の土坑(長軸1.1m・短軸



第24図 S K215・222・229平・断面図 S K204・215・222・229出土遺物

0.8m)である。深さは0.3mで、断面形状は不定形を成す。埋土は、細礫混粘土質シルトの単層。

遺物は、須恵器端脚高杯の脚部(72)が出土した。調整は回転ナデ。刃物のような鋭利な工具で縦→横の順に切り込む長方形透孔を1個確認した。5世紀後半の所産である。

S K229

2区北東部(5B区)で検出した。北部分が若干SK221に切られるが、概ね西南西→東北東に主軸をもつ楕円形の土坑(長軸1.0m・短軸0.7m)と推測される。深さは0.1mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は粘土質シルトの単層である。

遺物は5世紀後半の所産である須恵器杯身細片(73)が出土した。

S K231

2区の中央北より(6B・C区)で検出した。西端をSK233に、東端をSK230に切られた不定形な土坑である。遺構の北部では二段掘りによる段落ちを確認した。主軸は南西→北東で、長さは3.3m以上、幅2.8mを測る。断面形状はレンズ形を成し、深さは0.2mである。埋土は、極粗粒砂→細礫混粘土質シルト→シルトの単層で、土師器細片が混在する。

遺物は土師器や須恵器の細片が出土した。この内図化できた遺物は74~78である。74・75は土師器高杯の口縁端部へ杯部。74は稜の退化が顕著な有稜高杯で、口縁部外面にはハケナデ後縦位暗文調のミガキを、内面は横位ハケナデ後縦位暗文調ミガキを施す。76は土師器羽釜の鋤部。内面には右斜位ハケナデが行われる。77・78は須恵器。この内78は器台の脚部である。外面調整は、回転ナデ後沈線(3条確認)や波状文(10本/単位・3帯確認)を加える。透孔は2段分(上段:長方形、下段:台形)確認できた。以上の遺物は5世紀後半の所産と推測される。

S K233

2区の中央北より(6C区)で検出した、南北に主軸をもつ隅丸方形の土坑(長軸1.1m・短軸0.5m)である。北端には円形に二段掘りを行った部分が認められる。深さは0.1mを測り、断面形状はレンズ形を呈する。埋土は中礫混粘土質シルト→シルトの単層である。

遺物は、土師器製塙土器細片(79)や須恵器高杯細片(80)が出土した。79は指頭成形後ナデ調整(外面は板ナデの可能性あり)を行う個体である。80の脚部には長方形透孔が3個存在する。両者は5世紀後半の所産と推測される。

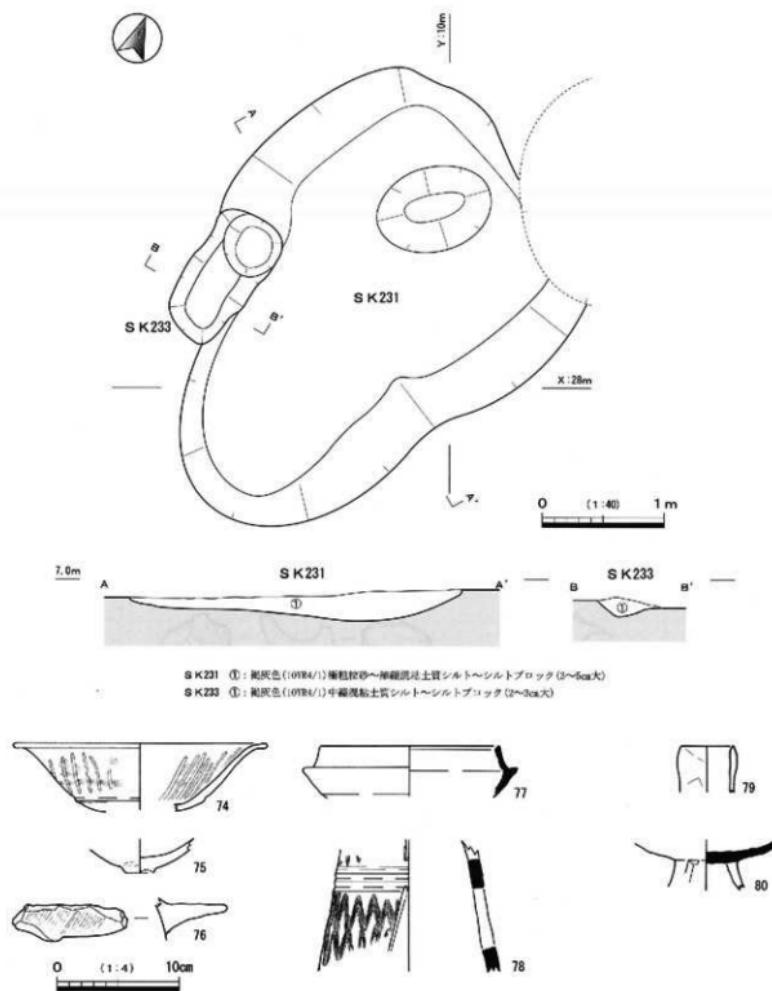
S K236

2区の中央やや東より(6B区)で検出した、南西→北東に主軸をもつ楕円形の土坑(長軸0.8m・短軸0.5m)である。南接するSK237を切っている。深さは0.3mを測り、断面形状は逆台形を成す。埋土は粘土質シルト→シルトのブロック土が充填されており、2層に区分できた。

遺物は、土師器の羽釜鋤部(81)や瓶底部(82)の細片が出土した。81は生駒西藏産の胎土を有する個体である。82の底面には、1+2以上の蒸気孔を穿孔している。中央の蒸気孔は円形を呈する。穿孔は、ヘラ状の工具を用いて切り込んだ後、横位ケズリで仕上げている。遺構の帰属時期は5世紀後半と推測される。

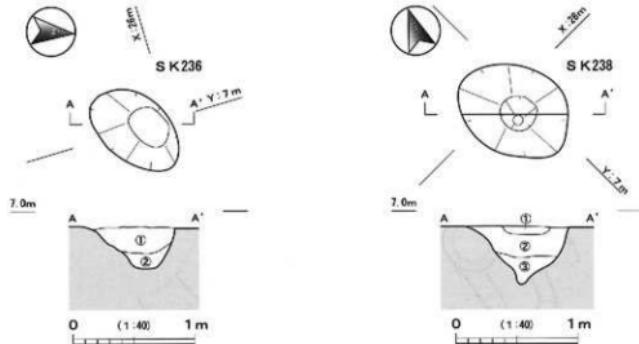
S K238

2区の中央やや東より(6B区)で検出した、北西→南東に主軸をもつ楕円形の土坑(長軸0.9m・短軸0.7m)である。北西に位置するSD205を切っている。断面形状はV字形を呈する。深さは0.4mである。埋土はブロック土が充填されており、3層に区分できた。



第25図 S K231・233平・断面図 出土遺物

遺物は土師器顎の把手(83)が出土した。83は指頭成形とナデにより形成された牛角状を呈する個体である。5世紀後半の所産と推測される。



①：褐色(10YR4/1)細粒粘土質シルトブロック(2~3cm大)

(炭化植物混在)(上部断片混在)

②：褐色(10YR4/1)粘土質シルトシルトブロック(2~3cm大)

(炭化植物少量混在)

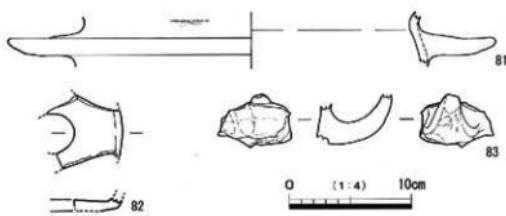
①：にがい黄褐色(10YR4/1)粗粒粘土～粗粒プロック(2~3cm大)

②：褐色(10YR4/1)細粒～中粒粘土質シルトブロック(2~4cm大)

(炭化植物混在)(土塊断片混在)

③：褐色(10YR4/1)粘土質シルトブロック(2~3cm大)

第26図 SK 236・238平・断面図

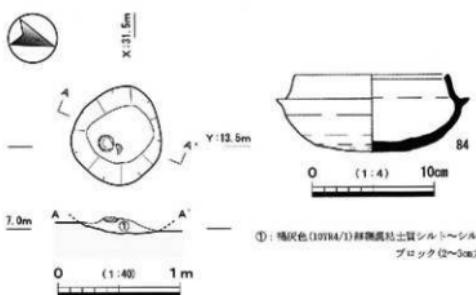


第27図 SK 236・238出土遺物

SK 242

2区の中央やや南西より(7C区)検出の、ほぼ円形を呈する土坑(長軸 0.7m・短軸 0.6m)である。断面形状は浅いレンズ形(深さ: 0.1m)である。埋土は細粒混粘土質シルト～シルトの単層である。

遺物は須恵器杯身(84)が出土した。復元口径 10.8 cm、器高 5.4 cm を測る個体で、杯部下位 4/5 は回転ヘラケズリを施す。5世紀後半の所産である。



①：褐色(10YR4/1)細粒混粘土質シルト～シルトブロック(2~3cm大)

第28図 SK 242平・断面図 出土遺物

S K243

2区の中央やや東より(6B・C・7B・C区)で検出した、南北に主軸をもつ楕円形～不定形を呈する土坑(長軸1.8m・短軸0.9m)である。遺構の北部では、平面形状に相似するように南北に長い楕円形の2段掘りが行われる。断面形状は浅いレンズ形(深さ0.1m)を呈する。埋土は粘土質シルトの単層で、土師器や須恵器の細片が混在していた。

図化できた遺物は須恵器杯身(85)である。受部は小さく、退化傾向が認められる。調査は、杯部下位外面に回転ヘラケズリが行われる以外は回転ナデを施す。

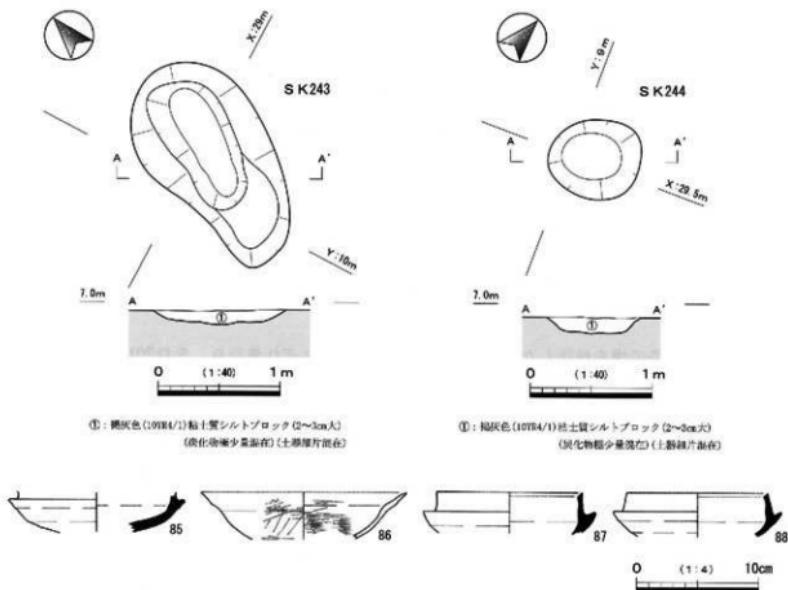
S K244

2区の中央やや東より(6B区)検出で、S K243の東約0.1mに位置する。南西～北東に主軸をもつ楕円形の土坑(長軸0.7m・短軸0.6m)である。断面形状は浅い逆台形(深さ:0.1m)である。埋土は、土師器細片の混在する粘土質シルトの単層である。

図化できた遺物は、古式土師器有段鉢細片(86)の1点である。86は、外・内面ともに密にミガキ調整が行われる側体で、精製品である。古墳時代前期(布留式期)の所産である。

S K246

2区の中央やや東より(6B・7B区)検出で、S K244の南約0.1mに位置する。南北に主軸をもつ不定形を呈した土坑(長軸1.4m・短軸1.0m)である。断面形状は浅いレンズ形(深さ:0.1



第29図 S K243・244平・断面図 S K243・244・246出土遺物

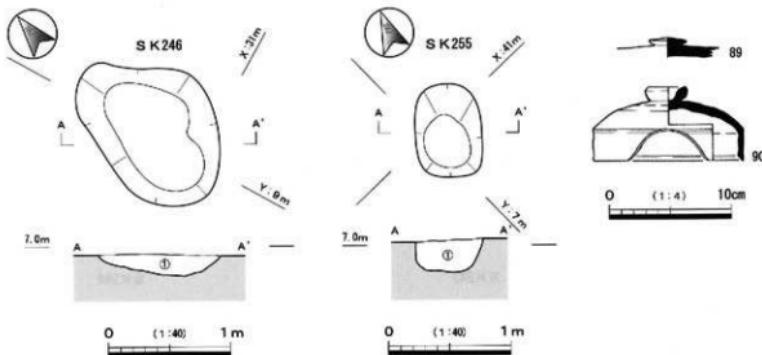
m)である。埋土は、土師器や須恵器の細片を含む粘土質シルトの単層である。

図化できた遺物は須恵器杯身細片(87・88)である。共に杯部下位外面に回転ヘラケズリを行う以外は回転ナデを施す個体である。概ね5世紀後半の所産と推測される。

S K255

2区南東部(9B区)検出の、北北東-南南西に主軸をもつ隅丸方形を呈した土坑(長軸0.7m・短軸0.5m)である。深さは0.2mを測り、断面形状は逆台形で呈する。埋土は、土師器や須恵器細片を含む粘土質シルトの単層である。

図化できた遺物は、須恵器蓋(89)、杯蓋(90)の2点である。89は扁平な擬宝珠様のつまみの付く蓋である。90は扁平で中央が窪んだつまみの付く杯蓋で、口縁部には焼成後の打ち欠きが行われる。5世紀後半の所産である。



第30図 S K246・255平・断面図 S K255出土遺物

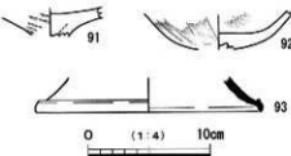
溝(S D)

2区では、4条の溝を検出した。各溝の構築基盤層はそれぞれ異なり、S D201はⅢ層上面、S D202・203はⅣ層上面、S D204はⅤ層上面に相当する。以下、各溝の概略を述べる。

S D201

2区の南部(6B・7B・C・8B・D・9D区)を北北東-南南西に直線的に伸びる大規模な溝(長さ14.9m以上、幅は4.0m)である。深さは0.8mで、断面形状は逆台形を呈する。埋土は遺物の混在するブロック土から成り、4層に区分できた。

出土遺物は、土師器や須恵器、瓦器の細片である。この内図化できたのは3点(91~93)である。91・92は土師



第31図 S D201出土遺物

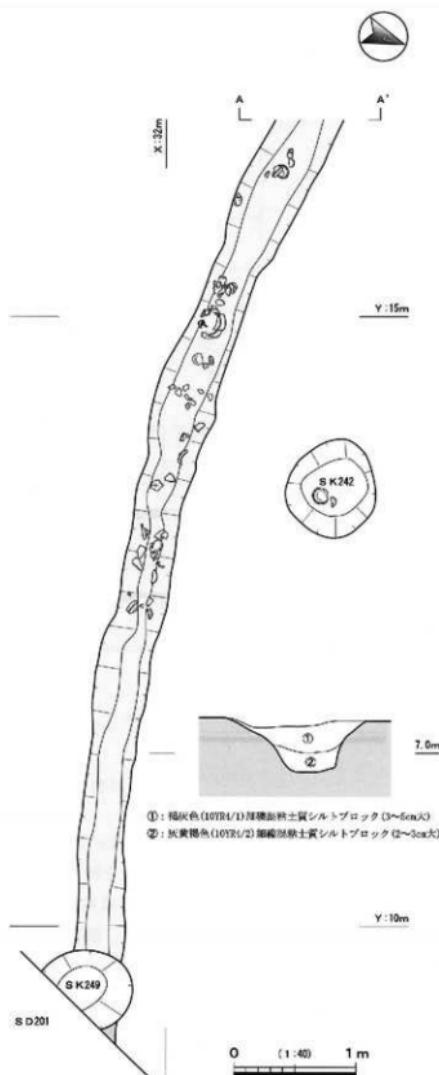
器高杯。91 の杯部裏面にはへそ状の突出が認められる。92 は椀形高杯の杯部で、外・内面ともにハケナデを施す。93 は須恵器高杯の脚部～脚端部である。端部は上下に拡張を行い、外傾のぶい端面を形成する個体で、外・内面ともに回転ナデを施す。

遺構の帰属時期は、瓦器細片が出土したことから、中世頃まで下ることが推測される。

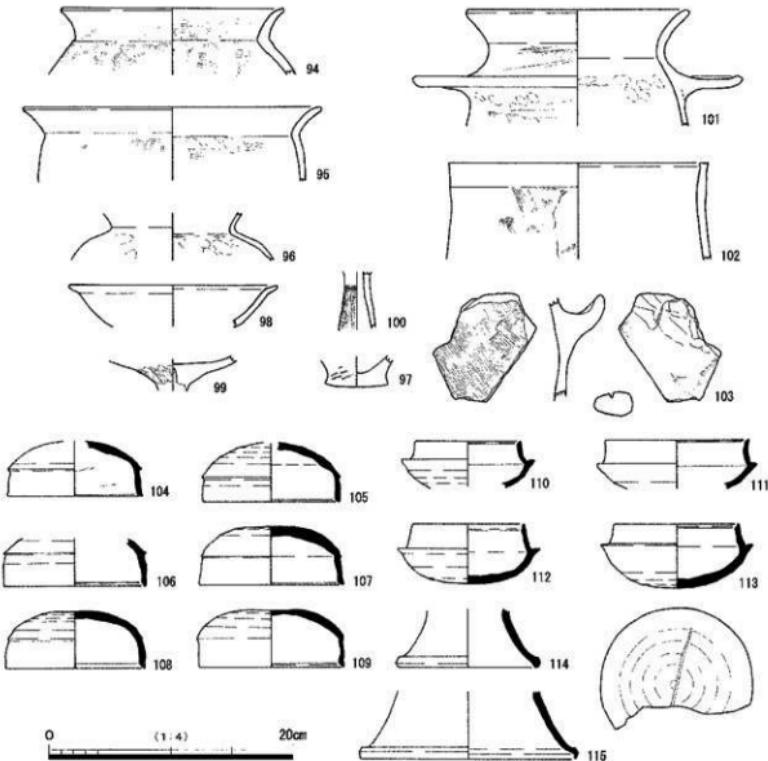
S D 202

2 区中央やや南より(7 B・C・D 区)で検出した溝である。本溝は、東部を S D 201 に切られるほか、西部は調査区外に至るため全容は不明であるが、概ね東西に直線的に伸びる。検出規模は、長さ 7.4m 以上、幅約 0.3m である。深さは 0.4m を測り、断面形状は浅い U 字形を呈する。埋土はブロック土から成り、2 層に区分できた。

本溝からは、投棄された可能性の高い土師器や須恵器が多く出土した。この内 94～115 である。94～103 は土師器。この内 94～97 は甕で、調整は概ねハケナデである。97 は突出した平底の底部で、外面にはタタキが施される。98～100 は高杯。この内 99 の杯部裏面中央には径 4～5mm の棒状工具を突き刺した痕跡を確認した。杯部と柱状部を接合する際に目安として使用した串状工具の痕跡と推測される。100 の柱状部外面のミガキは丁寧に行われる。101 は羽釜。大きく外反する口縁部と、水平に伸びた鰐部を持つ個体で、生駒山地西麓産の土を用いている。102 は瓶。外面には左斜面にハケナデを施す。103 は舌状の把手。把手上面には断面 V 字形の溝が刻まれ



第32図 S D 202平・断面図



第33図 SD 202出土遺物

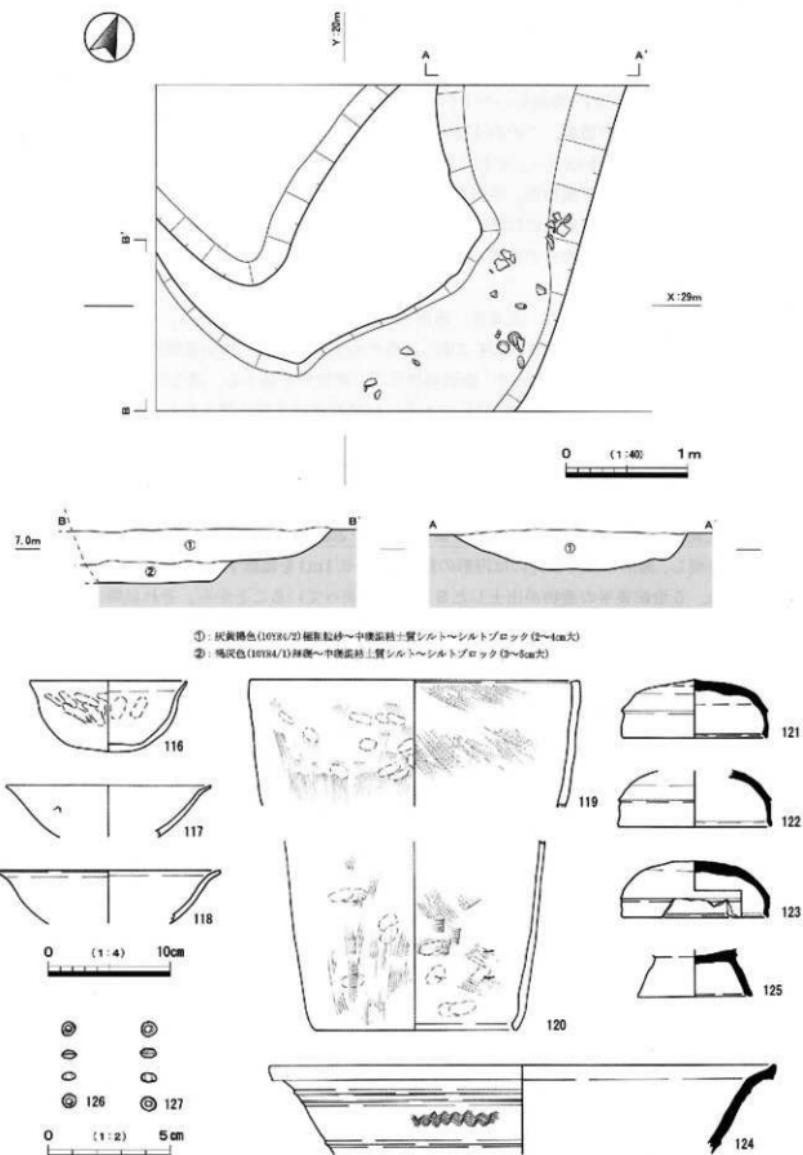
る。104~115は須恵器。104~109は、丸い天井部と稜を有する杯蓋群である。110~113は、外反気味に立ち上がる口縁部と、内傾の段を持つ端部を形成する杯身群である。この内113の杯部外面にはヘラ記号が刻まれる。114・115は高杯の脚部・脚端部。緩やかに外反する脚部と、上下に拡張を行う端部を有する個体群である。調整は回転ナデである。

遺構の帰属時期は、遺物群の特徴から5世紀後半と推定される。

S D 203

2区西端(6D・E・7D・E区)で検出したL字に屈曲する溝である。遺構の北部と南部、西部は調査区外に至るため全容は不明である。検出規模は、東西長0.8m以上、南北長2.8m以上、幅1.5mである。深さは0.4mを測り、断面形状は浅い逆台形を呈する。埋土はブロック土から成り、2層に区分できた。

遺物は、土師器や須恵器、石製品が出土した。この内図化できたものは116~127である。116



第34図 SD 203 平・断面図 出土遺物

~120は土師器。116は口縁部が若干内湾しながら上外方に開く口縁部を有する小型鉢。調整は指頭成形後ナデである。117・118は高杯。いずれも端部付近で小さく外反する個体である。119・120は瓶。両者ともに内・外面をハケナデ調整で仕上げる。121~125は須恵器。121~123は丸い天井部と稜を有する杯蓋群。この内123の口縁部には打ち欠きが行われる。124は器台の口縁端部~口縁部である。125は「ハ」字状に開く脚部の細片。端部には外傾する段を形成する。126・127は淡い黄緑色の滑石製白玉。平面形状は円形、側面形状は中央に稜をもつ算盤玉形を成す。穿孔は片面から行われ、側面には研磨痕(稜を境に上下ともに左斜位に研磨)を確認した。

遺構の帰属時期は、遺物群の特徴から5世紀末~6世紀初頭と推定される。

S D 204

2区北東部(5B区)検出の、北北東~南南西に直線的に伸びる溝である。本溝は、北東部が調査区外に至るほか、南西部がSK234に切られるため全容は不明。検出規模は、長さ1.6m以上、幅約0.9mを測る。深さは0.1mで、断面形状は浅い逆台形を呈する。埋土はブロック土の単層。

図化できた遺物は、須恵器杯蓋(128)である。口縁端部は外傾の段を有し、断面がにぶい三角形の稜を持つ個体で、口縁部には打ち欠きが行われる。天井部外面には赤色顔料の塗布を確認した。5世紀後半の所産である。

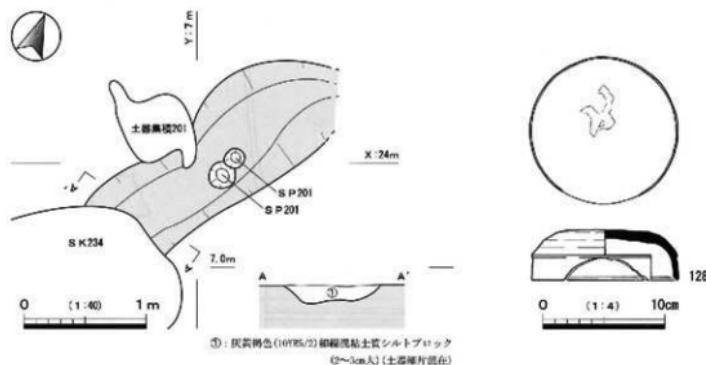
柱穴(S P)

2区北東部(5B区)において柱穴を2個(S P 201・202)検出した。いずれも平面形状は円形(径0.2m)を成し、掘形のほぼ中央には円形の柱痕跡(径0.1m)を確認することができた。深さは0.1mを測る。5世紀後半の遺物が出土したS D 204を切っていることから、それ以降に構築された柱穴であるが、詳細な時期は不明である。出土遺物は無かった。

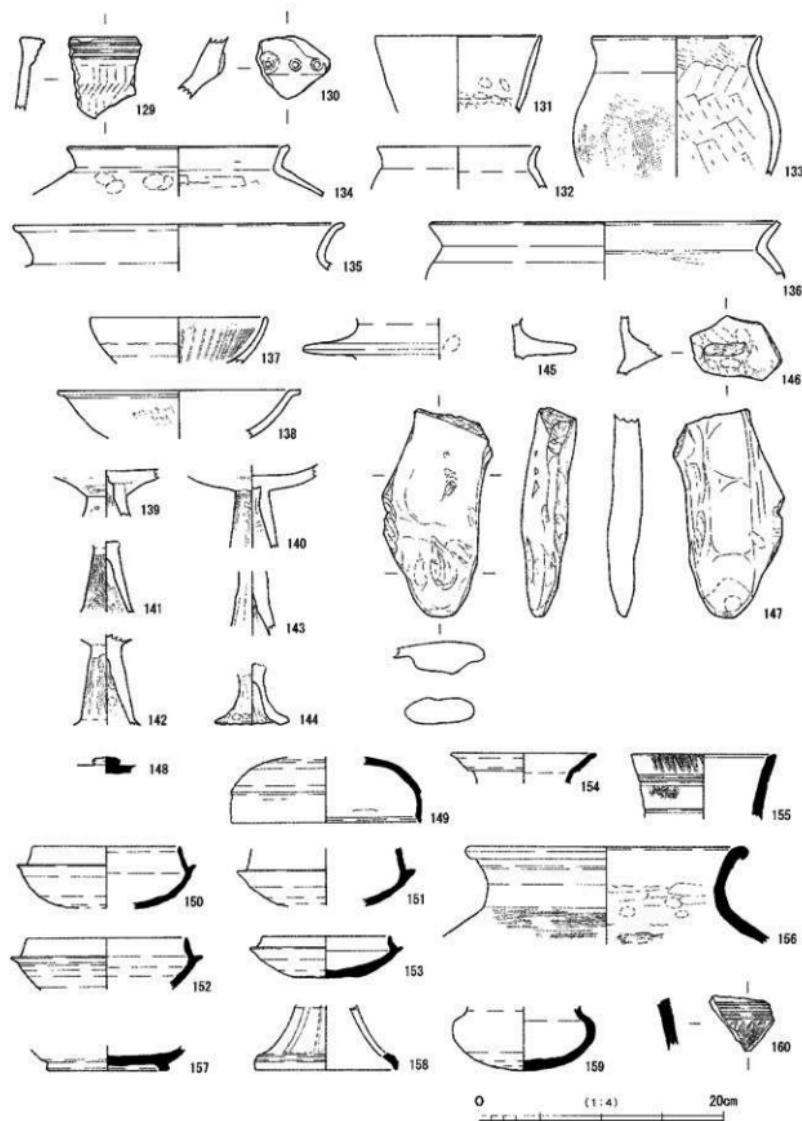
地層内出土遺物

1区Ⅲ層内出土遺物

129・130は弥生土器壺の口縁端部~口縁部細片である。この内129は、直立気味に伸びる口縁



第35図 S D 204平・断面図 出土遺物



第36図 1区Ⅲ層内出土遺物

部と、端部に若干外傾の平坦面を有する個体である。外面には3状の沈線文のほか、2帯の廉状文(上段：横位、下段：左斜位)、と1帯の烈点文を施している。中期末の所産である。一方130は外面に竹管押圧円形浮文を1個と竹管押圧文を2個確認した。後期に帰属する可能性が高い。

131は古式土師器の直口壺。外面には横位ミガキが施されるが不明瞭である。

132~147は土師器。132~136は甌。137は瓶。内面には左斜位ハケナデ後放射状ミガキを施す。

138~144は高杯。138は端部付近で大きく反転する個体である。139~142は柱状部外面を縦位ミガキ調整で仕上げる。139の杯部内面中央には、杯部と柱状部の接合時に用いたことが予測される心棒の痕跡を確認した。144はミニチュア高杯。指頭成形後板ナデで仕上げる。145は生駒山地西麓産の胎土を用いた羽釜である。146は舌状の把手。外面には指頭成形痕やハケナデが見える。

147は移動式窓焚き口の一部。下端は尖っており、前方に張り出す庇も確認できた。生駒山地西麓産の胎土である。

148~160は須恵器。148は蓋。扁平な擬宝珠様のつまみが付く。149は丸い天井部と稜を有する杯蓋。150~153は杯身。この内153のみ口縁部が短く内傾し、端部が丸く終息する。他の個体が5世紀後半~6世紀前半の所産に対して、6世紀末~7世紀初頭に帰属し、時期的に若干下る。154・155は壺。前者は直立気味に伸びる口頸部から大きく開く口縁部を持つ個体である。後者の外面には回転ナデ後波状文(6~7本/cm)を2帯以上、沈線文を3条以上施す。156は外反する口縁部と下方に若干拡張した端部を有する甌。157は「ハ」字状に開いた高台部である。158は脚端部を下方に拡張した高杯。外反する脚部には、長方形透孔を3方向から穿つ。159は扁平な体部を有する小型壺。体部下位には回転ヘラケズリが施される。160は器台の脇部細片。外面は回転ナデ後沈線(3条)や波状文(10本/cm)を施す。長方形透孔を1個確認した。

1区遺構面検出時出土遺物

161~163は弥生土器。161は、頸部に断面三角形の突帶を1帯貼り付けた壺の細片。突带上・下斜面には刺突文を施す。162・163は壺の底部。163の底面には貫通する小孔を3個確認した。

164~170、172・173は土師器。164・165は甌。166~168は高杯柱状部細片。この内166・167は外面に縦位ミガキを施す。168は面取りが行われる。172は生駒山地西麓産の胎土を用いた羽釜。173は移動式窓の焚口細片。僅かに底部が確認できた。胎土は生駒山地西麓産。

171は古式土師器小型丸底土器。外面には密に横位ミガキが行われる。精製品である。

174~179は須恵器。174は杯身。175~177は高台部。この内175・176の高台は「ハ」字状に開く。178はすり鉢の底部。底面は平坦を成す。179は端脚高杯の脚部。直立する端面を形成する。

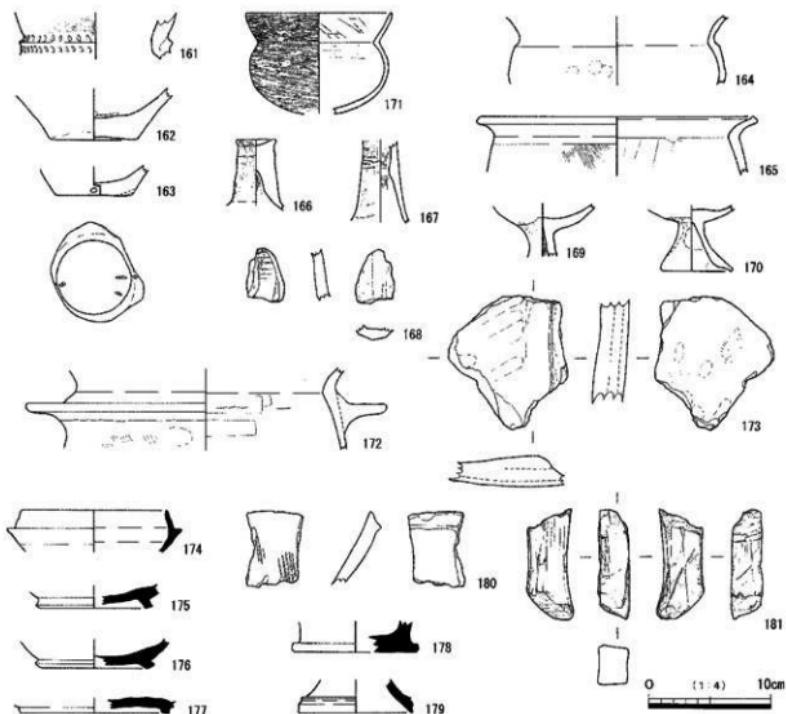
180は瓦質の和泉・河内型擂鉢。口縁端部は下外方に若干拡張し、端面はにぶい凹面を成す。

181は断面長方形を呈する石製品。4面に研磨痕を有することから、砥石である。

2区遺構面検出時出土遺物

182~188は古式土師器。182は口径が体部最大径を若干凌ぐ小型壺である。183は指頭成形後板ナデ調整で仕上げる小型鉢である。184は小型有段鉢。外・内面ともに横位ミガキを施す。精製品である。185は製塙土器。186~190は高杯。186は杯部内面に放射状暗文を施す。187・188は、概ね柱状部外面が縦位板ナデによる面取りが行われるほか、内面は横位ケズリを施す。

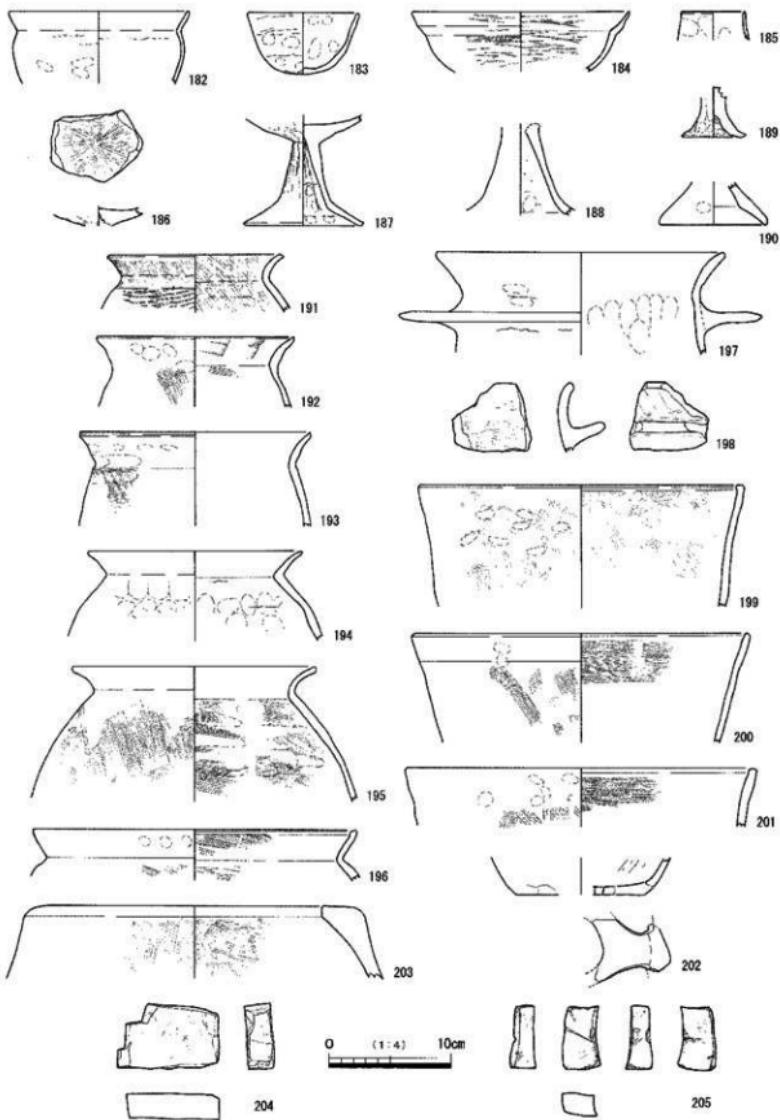
189~203は土師器。189・190は小型の高杯である。189は手づくねにより成形。裾部内面(杯部裏面に相当)には、型に合わせたような人工的な瘤みも認められる。190は裾部に円形透孔が見



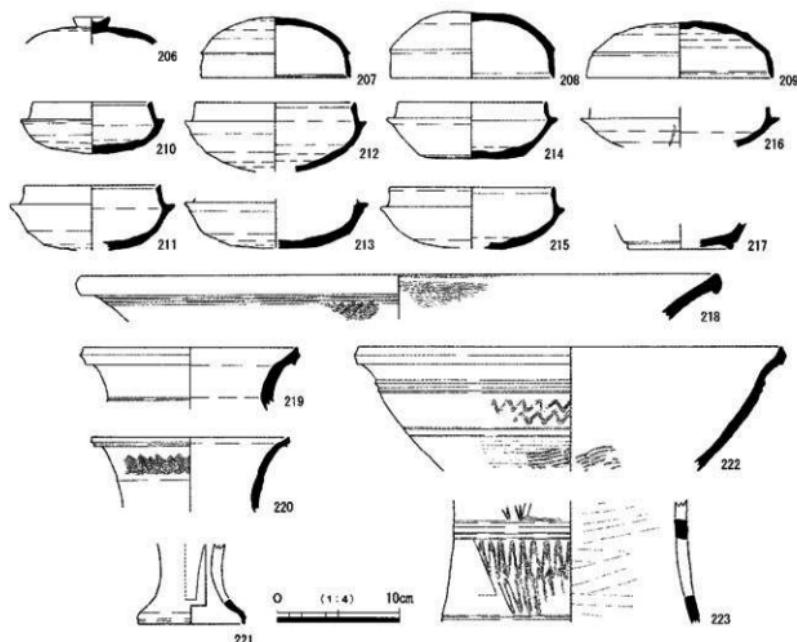
第37図 1区遺構面検出時出土遺物

える。191～196は概ねハケナデ調整が行われる甕である。197・198は羽釜。197の胎土は生駒山地西麓産である。199～202は瓶。この内199～201は、口縁部が上外方に若干開き、端部は小さく内厚する個体群である。外・内面の調整はハケナデ。202は底部。蒸気孔は、円形の中央孔と梢円形の周囲孔を配したことが推測される。203は移動式甕の焚口である。204・205は石製砥石。204は2面、205は4面に研磨痕を確認した。

206～223は須恵器。206～209は杯蓋。この内206は天井部に扁平で中央が腫んだつまみが付く個体である。207～209は、丸い天井部と稜を有する個体である。概ね5世紀後半に帰属するが、209は若干下る可能性が高い。210～216は杯身。216の杯部外面にはヘラ記号が刻まれる。217は「ハ」字状に開く口縁部を有する高台部である。218は大型の甕。外面には、断面三角形の突帯を2帯と波状文(8本/cm)を1帯確認。219・220は大きく外反する口縁部の壺。220の外面調整は、回転ナデ後波状文(9～10本/単位: 1帯以上)と断面三角形の突帯を2条以上加える。221は高杯。裾端部は内湾し、直立するにぶい凸面を形成。凸面の上・下端には沈線あり。裾部には長



第38図 2区遺構面検出時出土遺物 1



第39図 2区遺構面検出時出土遺物 2

方形透孔(2個確認)あり。222・223は器台。222は内湾しながら上外方に開く杯部と、上方に拡張した端部を有する個体。外面には、断面三角形の突帯を4条と波状文(5~6本/単位)を2帯を確認した。杯部下位は平行タタキ後カキ目を施す。223は胴部。外面調整は、回転ナデ後波状文(10本/単位: 3帯確認)や沈線(3条)を加え、最後に三角形透孔を入れる。透孔は鋭利な刃物を使用。縦×横の順に刃物を入れる。

第5章まとめ

古墳時代初頭以前

調査地全域において河川堆積層であるVI層を確認していることから、当該期の本調査地一帯が河道域に位置していたことが明らかになった。なお、本調査地の西約120mで実施された第64次調査地(TG2006-64)検出の弥生時代後期～古墳時代初頭の墓域は、本河道域の左岸に展開することが判明した。当該期の集落の範囲を知る上で、特筆すべき成果と言える。

古墳時代前期

この時期の遺構としては、SK103とSK244が該当する。この内SK103からは、古墳時代前期(布留式期新相)の土器群が意図的に埋置されたような状況を確認することができた。遺構内埋土を見ると、自然堆積層は全く認められず、ブロック土を充填していることから、①土器群を埋置するために土坑を掘削、②その後、土器群を埋設し、③すぐにブロック土で土器群を埋めた、という工程が推測される。本調査地では、両土坑以外に当該期の遺構の検出が皆無であったことから、付近において居住域が展開していた可能性は低い。したがって、SK103が何らかの祭祀に関連する遺構であった可能性を指摘しておきたい。

古墳時代中期

一方、古墳時代中期の遺構については、SK215・222・229・231・233・236・238・242・246・255・SD202・204などが挙げられる。この内SK231やSK233からは須恵器台の細片が出土したほか、SK255からは口縁部を打ち欠いた須恵器杯蓋が、SK242からは口縁部を上にした状態で埋置した可能性の高い須恵器杯身が出土した。以上のことから、当該期の本調査地一帯には、何らかの祭祀関連の遺構群が分布していたことが推測される。一方、SD202からは、多量の遺物が出土した。SD202は、直線的に伸びる細長い溝で、遺構内からは、土師器羽釜をはじめ、土師器碗や須恵器杯身、杯蓋などが投棄したような状態で出土した。本溝は、東西に直線的に伸びることから勘案すると、区画のための溝といった性格を有したことが予測される。この場合、本溝の北側で検出した上記祭祀関連遺構群の南端を画した溝であった可能性が高い。

古墳時代中期末～後期初頭

この時期の遺構としては、SK107・108、土器集積201、SD203が挙げられる。SK107からは、そのほぼ中央に須恵器甕が、SK108からは、ほぼ中央から須恵器コップ形鉢が出土した。この内SK107については、須恵器甕が土器棺であった可能性が推測され、注目に値する。一方SK108から出土したコップ形鉢は、口縁部を下に向いていることが特筆され、何らかの祭祀に伴う遺構の可能性が高い。またSD203からも土器群が出土した。SD203は、北側、南側、西側がそれぞれ調査区外に至るため全容は不明であるが、L字に屈曲する溝の可能性が推測される。遺構内からは、土師器甕や須恵器杯身のほか、滑石製白玉などが出土した。平面形状や出土遺物の特徴からは、本溝が古墳の周溝であったことが予測でき、須恵器台や埴輪片が出土した土器集積201をはじめ、遺構面検出時に出土した当該期の遺物群の存在などを勘案すると、当該期の墓域が展開していた可能性が高い。以上のことから、当該期は、前代に引き続き祭祀に関連する地域であったほか、墓域としても利用されていたことが推測される。

中世以降

SD102・103、SD201が挙げられる。この内SD201は、幅が約4m、長さが18m以上の規模を有する大型の遺構で、直線的に伸びることから、何らかの規格に則った溝であった可能性が高い。これらの溝は、開削時期や機能時期は不明であるが、埋土内には瓦器碗の細片が混在することから、この頃にはその機能を失っていたと思われる。

近世以降

各調査区の地層断面で確認されたI層水田耕作土層と、それに伴う動溝であるSD101が該当する。近世以降の本調査地における土地の利用は、水田耕作を中心とした生産域であったことが

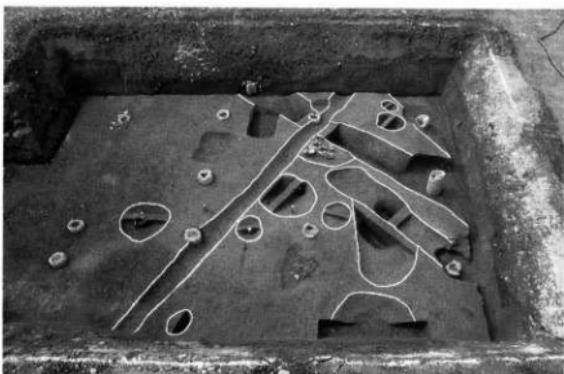
判明した。そしてこの状態は、昭和50年代に行われた区画整理事業まで変わることはなかった。

参考文献

- ・西岡三四郎 1977 「人面土器」『八尾市史(文化財編)』八尾市役所
- ・高萩千秋 1981 「東郷遺跡発掘調査概要」『八尾市遺跡・東郷遺跡発掘調査概要』八尾市文化財調査報告6 昭和55年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
- ・坪田真一他 2006 「22. 東郷遺跡第64次調査(TG2005-64)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・米田敏幸 1990 「中南河内の『布留系』土器群について」『考古学論集 第三集』
- ・中村 浩 2001 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- ・佐藤 隆 1992 「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告書V』(財)大阪市文化財協会
- ・樋口 薫 2006 「埋蔵文化財発掘調査報告 郡川東塚古墳第1次調査(T2001KOH) 第3節 遺物編」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告7 平成17年度』八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会



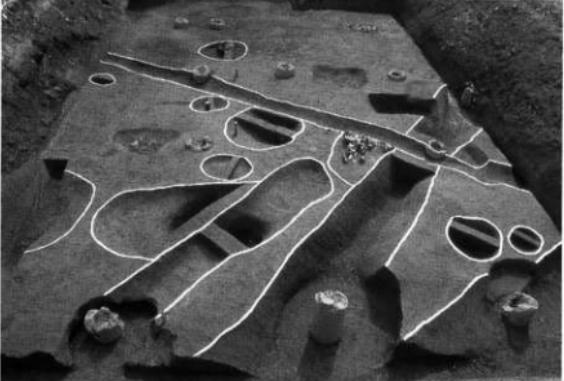
図 版



1区全景(南から)



1区全景(南東から)



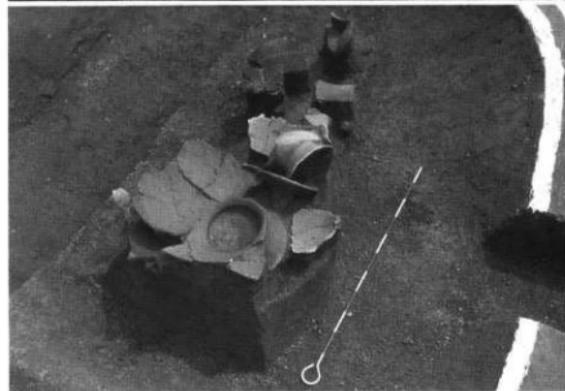
1区全景(東から)



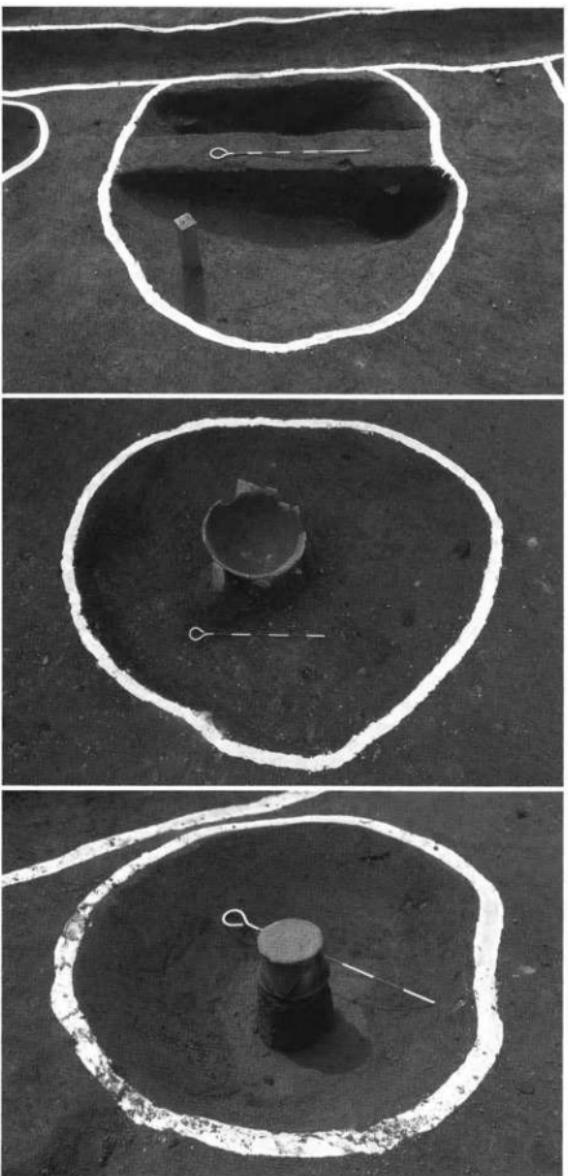
SK 103(北東から)



SK 103(北東から)



SK 103(南西から)



SK106(東から)

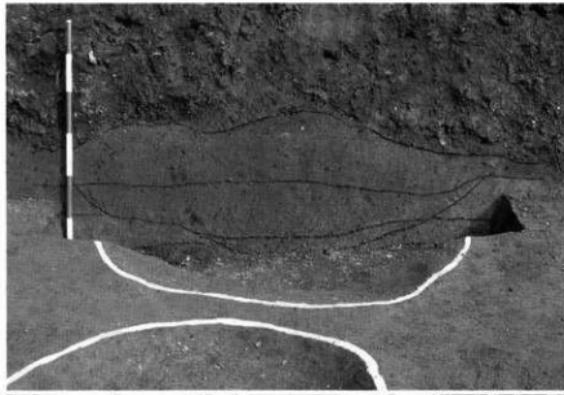
SK107(南から)

SK108(南東から)

図版四



SK110(南から)



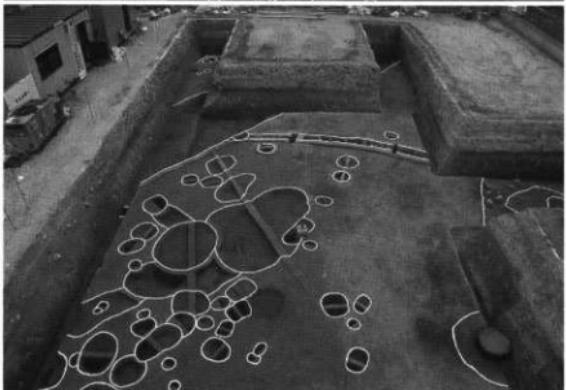
SK112(北から)



1区東壁(西から)



2区全景(北東から)



2区全景(北から)

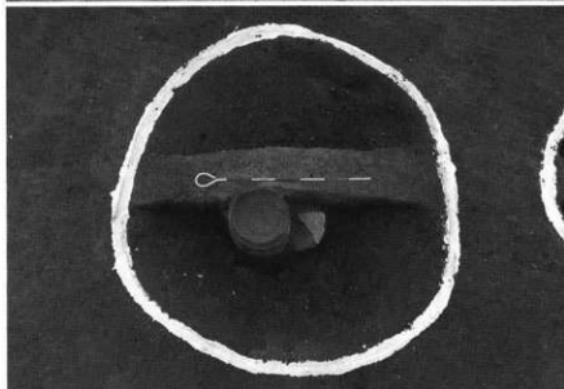


2区全景(北西から)

図版六



S E 201(北東から)



S K 242(東から)



S D 201(北東から)

